のお心の有難さは、充分に能く分り生涯忘れは致しませんが、夫でも唯だ此事ばかりは」

「エ、エ、此事ばかりは出來無いと云ふ積ですか、イヤ爾云はずに、爾云ふ前に篤く考へて見て下さい、五田公爵夫人と爲れば何の樣な慈善の仕事でも出來、英國の貧民を皆喜ばせる事も出來ます、女皇が政治の上に敬はるゝ權力は、公爵夫人が社會の上に敬はるゝ權力です、何の樣な無理な望みも五田夫人の心から出れば屆きます、人間の出來る仕事で五田公爵夫人の出來ぬと云ふは有ません、他の貴族に對しても君主の樣な勢力が有るのです、貴女が何か今の身分で、思つても達せられぬ望みは有ませんか、其望みが何れほど無理でも、私しの妻と爲れば必ず達します、是を能くお考へ下さい」

と只管に賴み入り、殆ど韋倫に返事する際間も與へず、何の樣な無理でも必ず達する程の權力とは、實に韋倫が今の身に何より欲しき所なり、公爵夫人と爲りたりとて、夫が爲め

我が復讐の一念の屆く可しとは思はれねど、今の身にては復び春人に近寄る事さへ叶ひ難し、公爵夫人として春人と同じ貴族の社會に入り、而も彼より上に位し、限り無き富と、限り無き力とを手に握らば、今日何より難き事も或は最易きに至らんかと、公爵が最後の言葉にてフト我心に浮びたれば、韋倫は公爵の願ひ通り、兎も角も篤と考へたる上にて返事する事に決し、

「では、考へる丈は考へて、其上御返事を致しませう」

と云ふに、公爵は、

「イヤ唯考へずに、何とか私しの願ひを叶へて遣り度いと、斯う思つて考へて下さい」

と云ふ。韋倫は再び返事せず、唯だ心に復讐、復讐と唱へながら分れたるが、韋倫の心迄に如何樣に決せんとするや。

二八

五田公爵の妻と爲り公爵夫人と崇められて、王宮にも並ぶ程なるサクソン宮の女主と爲るは、英國幾萬の婦人が皆望みて、皆絶望せる所なるに、其位地今は求めずして我身の上に降來る、之を思へば唯だ夢の心地にて身の程が恐しき許りなるも、韋倫は今が今まで再び人の妻たらんとは、思も設ざりし事なれば、此夜一夜を考へ明せしに、世間の人悪々く我身を見捨て、我身は既に浮む瀬も無き程に深き日蔭に沈みたる者なるに、公爵の尊き身分を下し我身の前に膝折りて願ふ心は實に深さ知られぬ大恩にして、之に負くは人に非ず、斯くも情知る人の爲にこそ、命も捨てゝ一身を惜からじと、漸く心に動き初めたれど、又思へば我身には最と恐しき履歴あり、公爵は之を知らず、我身を唯だ生れ立の小兒の如く、

何の祕密も無き最と清き者とのみ思ひて、我身を愛し初めしなるに、其恐ろしき履歴を隱し、公爵の妻と爲るは、欺きて妻の位地を偸むに同じ、打明れば最も意外の想を爲し、其愛の醒果るやも知れざれど、兎に角有の儘打明けて公爵の判斷に一任せん、打明しが爲め驚きて約束を見合さば夫迄とし、打明るも猶ほ我身を妻にせんと云はば、夫こそ眞實に我身を愛するもの、我身に縱しや愛の心枯盡せしとは云へ、有ん限りの力を以て公爵を尊ひ、出來得る限に公爵の生涯を幸福ならしめん、公爵の妻たる間には復讐の折も自から來るならんと、斯く思ひ定めたれば翌朝は先づ父に相談するに、父も韋倫と同じ意見なれば、直ちに公爵に一片の書面を送り、昨日のお言葉に就き確な返事を申上る前、充分お聞に入れ置たき事ありと言遣りしに、公爵は後とも云はず飛來りしかば、嬢は靜なる一室に伴ひ入り、最落着たる言葉にて、

「貴方は定し私しを、何の履歴も無い清い小兒の様に思ひ、夫ゆゑ昨日の事をお言出しに成たでせうが、年こそ若けれ、心には老女にも無い程の容易ならぬ履歴が有ます、斯様な履歴の有る女が公爵夫人と云ふ高き位地には上られまいと思ひますゆゑ、茲で充分に申し上げます」

とて、先づ口を切らんとするに、公爵は其言葉を聞くをだに恐るゝ如く、

「イエ最う何にも仰有るな、聞くに及びません、此の清かなる貴方の身に公爵夫人に成られぬ様な、其んな履歴は有る筈が有ません、私しは堅く信じ何にも聞かずに貴女を妻にしたいのです」

とて、一言も云はしめざれど、

「イエ充分に聞て戴き、爾して貴女のお心を聞た上で無ければ、私しの返事は出來ません」

と云ひ、是よりして我身の過ちを少しも飾らず、有し儘を其通りに打明るに、公爵の顔色は聞くに從ひて青くなり、果は其前額に汗を浮め穏かならず身震ひせり、若し韋倫にして少したりとも、此公爵を我が方へ動かさんとする心あらば、唯だ一言、唯だ一句の飾り様にて、我身に震い附しむるも最と易き業なれど、韋倫が生得ての清き心は、假初にも又露ほども言葉を飾るを許さず、堅く我身に一點だも、女の道に負きたる振舞なしと信ずる故、我身の事を述ること宛も他人の事を述るが如く、容赦も無く會釋も無く說終りて、

「サァ貴方が公爵夫人に仕たいと云ふ其女には、是程の恐しき履歴が有ります」

と言切りて、後は無言に公爵の返事を待つのみ、聞終りたる公爵は其顔、其樣子全く別人に似たり、唯だ痛く驚きて返す言葉も無きが如く、暫し嘆息するのみなりしが、良ありて、

「眞に恐ろしい話です、此の十九世紀に其樣な惡人が有ませうか、其樣な惡事が十九世紀

の白晝に行はれて居やうとは思はれません」
と叫び、再び深き嘆息と共に、
「成る程、貴女の身には罪も無く汚れも有ませんが、罪と汚れとは總て其の貴女を欺いた男の身に在るのですが、夫でもー、ハイ夫でも社會の規則は、罪を犯した人も犯された人も、同じ樣に看做しますから」
と云ふは、其身も早や既に韋倫をば公爵夫人と爲すに足らぬ、汚れし者と看做せるにや、韋倫は情無き聲を絞り、
「其樣な社會の規則とやらには、私しは服しません、私しは唯だ神に訴へます、自分の心に罪を犯さぬ者が、社會の眼で罪人と同じ樣に見て仕舞はれ、同じ樣に罰せられて何うして服する事が出來ませう」

と打叫ぶに、公爵は何と思ひしか返事する樣子無し、韋倫は更に、
「貴方までも社會の規則と同じく罪を犯した者と、其罪を犯された不幸の人とを同じ樣に見て仕舞ひ、私しを汚れた罪人に數へますか」
公爵は止を得ず、
「イエ、決して罪人に數へると云ふ譯では有ませんがー」
と言掛けて口籠るは、我が心を現はす可き適當の言葉なきが爲か、或は今までの熱心冷果たる爲なるか、韋倫は强て我が心を落着けつゝ、
「イエ是だけの事を貴方に打明けて、誠に好い事を致しました、少しでも此履歴を隱して置ては後々まで心が濟ません、之を打明たが爲に、貴方が私しを公爵夫人に出來ぬ女だとお思成つても、私しの道は是で盡きました、此から後は唯だ貴方のお考へ一つです、是でも公

爵夫人とする事が出來ませうか」
と他人の事を問ふ如く、靜かに問ふに、公爵は嘆息の音も止みて返事せぬこと木石の如く、一室の内唯だ物凄きほど靜かなり。

二九

ア、、五田公爵は無言にて何事を考ふるや、韋倫の話たる秘密を聞き、韋倫の身の我思ひしほど清からぬを見て、公爵の妻には爲し難しと思ひ、然る可き斷りの言葉を考へつゝ有るにや、何さま心の中は一力ならぬ苦みと見え、殆ど其顏を上げも得せず。

貴族の家には、貴族だけの格式あり、一家の格式を破らんよりは、寧ろ家格を守りて死せんと云ふもの、眞の貴族が幼き頃より其心の奥底に蓄ふる心なり、今まで何代何十代の

間、五田公爵夫人と云はるゝ者、幾人何十人の上に及べど、一人として其素性の雪よりも清からぬは莫く、婚禮前の身の上に他人に聞かされぬ如き秘密の有る者無し、斯る清淨なる家柄を我が一代に至りて傷け、唯だ我が愛の爲め快樂の爲め、秘密の履歴ある女を迎へて好かる可きや、是れ公爵が決し兼たる所なり、通常の心より考へ見れば公爵が此場合に斯まで自ら苦みて、決し兼ること殆ど怪む可き程なれども、斯も嚴重の氣質にして一點の暗き事にも與し得ざる人なればこそ、今まで公爵家の家名を何の汚れも無く支へ得しなれ。

韋倫は最早や此の無言なる公爵が口を聞くを待つ能はず、强て公爵夫人たるを願ふ如くに思はれては、清き我身の品位にも障ると思へば、公爵の無言なるを其愛の醒し者と見、我身を公爵夫人たるに叶はぬ女と見し者とし、未練も無く其所を立去らんとせり。嗚呼韋倫は唯だ我身の品位を全ふせん爲め、生涯に又と無き此の出世の機を取逃さんとするか、

何故唯だ一語の優しき言葉を發し公爵の心を動かさゞるや、唯一語の言葉にて公爵は一切の思案を捨て、韋倫の手の内に轉び入る可きに、ア、韋倫は浮む瀨を取逃さんとす。

韋倫が今や立上らんとする折しも、公爵は顏を上げ、山嶽前に倒れ來るも驚かじと云ふ程の決然たる口調にて、

「イヤ孃よ、貴女の話を聞き篤と考へて見ましたが、貴女の身に少しも汚れは有ません、是ほどの辱しめに逢たればこそ益々貴女の身の清い事が分ります、此後何れほどの辱しめに逢ふとても、決して其辱しめに瀆されぬと云ふ事が此履歷で分ります、實に生れ立の小兒より猶ほ心の清いと云ふは貴女の事です」

と眞心込めて言切りたれば、韋倫は四面皆敵の中に、唯一人己れを知る救主に逢たる如く限無き嬉しさに、我知らず公爵の手を取りて、

「本統に爾まで仰有ッて下さるは、唯だ貴方ばかりです」

と云ふに、公爵此一語に魂も消え氣も盡きて、唯だ韋倫を愛するの心の外に何の思案も、何の意見も無し。

「イヤ孃よ、貴女は今まで保護して呉れる人が無い爲めに、惡魔に誘なはれ社會の道を踏み迷ふたと云ふ者です、是れからは私しの手に縋り、本統の道まで踏返らねばなりません、私しの愛、私しの名前は充分貴女を保護します、今まだ五田公爵夫人と云はれる者で、他人から指一つさゝれた者は有ません、五田公爵夫人と云へば、人は其履歷も何にも聞かず、五田公爵夫人と爲る程だから必ず清淨無垢だらうと、斯思ひます、公爵夫人の地位は一切の譏りや、一切の瀆れより遙に上に在るのです、今までの貴女の身の上は、誰に聞せても少しも恥る事は有ませんが、夫にしても生涯私しの口から外へは出ませぬ、最う全く消て

仕舞た秘密です。貴女も決して私しへ打明けたのを後悔する樣な事は此後にも有ません、サア是で何も彼も定りました、貴女の返事は如何です、私しの妻と爲て呉れませうか」

韋倫は、再び公爵の手を取りて、

「ハイ貴方の妻と爲り、私しの力の有ん限りは貴方の爲に盡します」

是にて夫婦の約束は全く定りたれば、公爵は限り無く喜ぶうちに、猶ほ一つ氣に掛る所ある如く、

「イヤ是切りで最う此秘密は、貴女も私しも全く忘れて仕舞はねば成ませんが、其前に唯一つ問はねば成らぬ事が有ます、貴女を爾まで欺いた其惡人の名は何と云ひます」

韋倫は顏の色を青くせしも、

「イエ、夫ばかりは云ふ事が出來ません、生涯我が口から出さぬ事に、我心に誓ひました

から」

「では何んと願ふても」

「ハイ其人の名を我口に唱へるは、我身を汚す樣な者で、何よりも穢はしいと思ひますから、決して其名前は云ません」

明かに斷られて、公爵は遺憾に堪へぬ樣子なるにぞ、

「名前を聞て何うなされます」

公爵は殆ど血相變へ、

「貴女の敵は最う私しの敵も同じ事です、其者を探し出して充分の罰を與へ、此世に居る事の出來ぬ樣に仕て遣たいと思ひます」

「其のお心は有難う存ますが、心の誓ひを破る事は出來ません、他日仇を返す時が有れば

私しが返します」

とて一歩も動く色なきにぞ、公爵は韋倫が心の最堅きに感心し、唯だ顔の美しく心の清きのみならず、往古の烈女にも耻かしからぬ、一個の決心ある女と見、益々感心するのみにて再び其名を問はず、此夜韋倫は神に祈り、我復讐の近くなりしを謝したりと。

三〇

女一代の出世は唯其の心掛に在り、心掛の好らぬ爲め出世の階段を踏外し、再び浮む由も無き社會の下層に沈む者幾人なるを知らず、韋倫の如きは身に恐ろしき履歴は有れども、唯胸に一點の臺無く、女としては世に又と其類無ほどの心掛を持たればこそ、幾萬の婦人が望みても得ぬ程なる、五田公爵夫人と迄出世するを得しものと云ふ可きか。夫は扨置き、

愈々夫婦約束の定りてより、公爵は唯だ韋倫の身を引上するのみ勉めて、外の事は手にも附かず、羅馬市中にて飾物師と名の附く者は入替り立代り、悉く公爵の前に召出され、韋倫の身を飾る可き裝束品の調達を命ぜられ、日として幾行李の新しき荷物、スペロル宮に來らぬは無し。中にはゼノア市より來る天鵞絨あり、シランより來る編緣あり、リオンより來る絹物、露國より來る皮類など、殆と數へ盡されず、公爵は猶之にも滿足せず、着物の仕立は巴里に限ると稱し、巴里に在る英國公使館にて婚禮を行ふ事とし、自ら韋倫に先立て巴里府に行きたり。實に韋倫の幸福は天下に並無しと云ふ可し。唯だ所天の年齢少しく多過るとは云へ、當年四十八歳の男盛なり、殊には何不足なく贅澤に暮せし人とて、身體最と強壯にして顔に一筋の皺も無く、他人の目には殆ど四十の上には見えず、格服も立派にして心に無限の愛を蓄へ、殊に位は臣民の最上たる公爵なり、女の身として此上の出

世ある可けんや、公爵が巴里に行きてより二週間を經、韋倫も父と共に羅馬府を立ち巴里に至り、無事に婚禮を終りたり。韋倫の心にては成る可く我が身が公爵夫人と爲りし事を、彼の西富春人に知せまじと思ふ故、公爵に請ひて婚禮は成る可く靜に之を行ひ、又我が名前は新聞などにも出さしめず、去れば五田公爵結婚の噂は、其妻が非常の美人たる噂と共に早くも英國に傳はりて、貴族社會を騷す程の風說と爲りたれども、其新婦の誰なるやは何人も知る能はず、或は佛國の貴夫人ならんと云ひ、或は伊國の貴族の娘なりなどと評し合ひたり。

婚禮の終ると共に韋倫の父團墩氏は、伊國の古宮ほど良き所は無しと云ひて古宮に歸り、韋倫は所天公爵と共に密月の旅に上りたるも、今まで我家として定めたる生涯の家の無き韋倫の身に取りては、早く我が落着く可き所天の家に歸り度く、旅は四五ヶ月ばかりにし

て切上げ、英國第一、寧ろ私人の住居としては世界第一とも稱す可き、英國のサクソン宮に歸る事と爲りしは翌年の花咲く春の央なりき。

公爵が他國より歸來ると云へば、其一地方に取りては大祭とも云ふ可き程の大事なれば、土地の人民家を空くして道筋まで出迎ふる習ひなれど、韋倫は斯る事々しき見榮を好まず、所天に乞ひて唯だ公爵家の家從長にのみ、電報を送り一臺の馬車を停車場にまで出迎はせ、其他は誰にも知せざる事としたり、既に其の停車場に着き、馬車にてサクソン鄕に入るや、高大なるサクソン宮は目の前に在り、見渡す限り果も無き廣き庭に、今を盛と咲き競ふ花の色は、宛から燃るかと疑はるゝ許りにして、今まで經巡りたる歐羅巴の孰れにも、是ほどの眺めは無し、是が我が生涯の住居かと思へば今更らの如く嬉しさの胸に充ち、馬車の中にて公爵に打向ひ、

「サクソン宮の立派な事は塚て世間の噂にも聞き、名所案内などでも讀ましたが、是ほどで有うとは今まで思ませんでした」

と云ふに、公爵は最と滿足の體にて、

「イヤ英國第一の莊園だと云ふ事だが、是からは又英國第一の美人が鎭座する、神廟に成ると云ふものだ」

と答へ、道の長きをも覺えざりし。

頓て馬車其の門に着けば、韋倫は降立ながら宮の構への又更に宏壯なるには、思はず首を回らして見廻はしたり。公爵は韋倫を扶けながら、

「定し疲れた事で有う、暫し居間に入り休息すれば、家の中の室々へ案内して古書畫其他の美術品など　見せて遣う、和女は父の氣を受て美術が好きで、幸ひ當家は英國古今の美

術を悉く集めて有ると噂される程だから」

と云ひ、手を引きし儘、設の居間に連て入り、兼て雇はせ置きしと見え、玆に待つ三人の侍女に韋倫を渡しつ、公爵は又其身の室に退きたり。

後に韋倫は暫し用事も無しと云ひ、侍女を退けて獨り長椅子に沈み入しが、見れば見るほど物事の立派にして、殆ど我身の落着かぬ程なりしも、我身が此宮の女主人なりと思へば、間も無く心之に添ひ、極樂の園よりも猶居心好き事となりぬ。

玆に幾日をか過すうち、公爵の歸り來りし噂は次第に知れて、尋ね來る人益々多く、來る人毎に公爵夫人の美くしき姿と、其起居振舞より物言の優しくして、殊に客待ひの行屆けるに感心せぬ者とて無く、夫人を褒むる聲は其所此所に聞ゆる事となりたれば、公爵も最早や我新夫人を交際社會に披露す可き時來れりと思ひしか、或日韋倫の居間に來り、愈

愈披露を執行ふ旨を告げ、其宴に招く可き來客の名前なりと云ひ、一個の名簿を披示し、初より順々に其身分を說明し始めたり。

孰れも當家の淺からぬ交ある者のみなれども、韋倫の身には一人の知人も無ければ、唯だ無言にて聞居るうち伯爵是蘭と云ふ名前に到りしかば、韋倫は是が我身の血を見る敵、彼の西富春人の其妻李羅子の父なりと思ひ、忽ち折驚くと共に、我胸は破れるかと疑はる程に鼓動し、我目の前には一面に火の燃上るが如くに見え、室中に恐ろしき霧立込めて、我身は其中に包まれ呼吸も塞がるかと怪まれたり。

三一

是蘭伯爵の名を聞きて、我身は宛も深き毒霧に包れし如く、呼吸さへも爲し得ざるに、

所天公爵は夫れとも氣附かず、說明の言葉を續け、

「噂では聞て居やうが、此是蘭伯爵は當代第一の政治家で、一番大切にせねば成らぬ客だ、私より年は二つほど上だけれど、一緒に學校を卒業し、妻に死れたのも同じ年だ、私は二度目の妻に逢ひ、其悲みは忘れたけれど、伯爵は今以て獨身だが、其代り娘が有る」

娘とは李羅子の事ならんと、韋倫は其名を聞かぬうちより、胸の波益々高く打つを覺ゆるに、果せるかな公爵は、

「娘は名を李羅と云ひ、今では英國一の美人と云れて居るけれど、和女が出れば顏色は無い、詰り交際社會の大達者と云ふ看板が、此の李羅子の身から和女の身に移るのだ、友人の娘は自分の娘も同じ事、和女が李羅子と睦しく仕て呉れゝば私は何よりも嬉ばしい、所が此李羅子は一昨年婚禮して、今は立派な所天が有る」

ア、愈々西富春人の名を聞く事かと、韋倫は身も世も有られぬ想を爲すに、公爵は唯だ當代に時めく人々を說聞かせて、韋倫を喜ばせんと思ふ一心なれば、猶ほ韋倫が顏色の如何ほど變れるやに心附かず、

「所天と云ふは、是も是蘭伯の引立で追々政治界に名を知られる、子爵西富春人だ」

韋倫は聞くに得堪へず、

「ウン」

と叫びて悶絕せんばかりなりしも、いま叫ぶ如き事ありては、我が敵の其の西富春人たる事を公爵に悟られて、如何なる事と爲らんも知れずと、唯だ必死の思ひにて自から制し、卓子の下に手を握りて堪らふるに、公爵は又言葉を繼ぎ、

「此の一族三人は、客の中の客とも云ふ可き程だから、和女が自身で接待をせねば成ぬ、

接待とても別に六かしい事は無い、總て和女の適宜だけれど、成る可く親しく交りて、打解けて話などする樣に」

と云ふ。ア、如何して彼れ春人と打解らる可き、唯だ彼れに深き恨を返さんのみの爲に、此世に存ふる程なるに、湧返る程の想ひを又漸く堪へんとするに、此時初て公爵は、韋倫の尋常ならぬ顏色に心附き、

「オヤ、和女は何うかしたのか」

「イエ何うも致しませんが」

「オ、餘り一室に閉籠つて居る所爲で有う、氣分の勝れぬとき此樣な話は惡い、暫し休んで居るが好い」

と云ひ其室より退きたり。

後に韋倫は唯獨り考へ見るに、名を聞きてさへ我が總身の震出す程なるに、彼れを此家の内に招ぎ、彼れと同じ室に坐し、彼れと言葉を交へん事、迚も我が力の及ぶ所に非ず、復讐を仕遂ん爲には何うせ彼れと顏合さねばならぬこと勿論なれども、我身に猶ほ充分なる復讐の工夫とても無き中に、彼れに逢ふは、後れを取るに極りし事なり、夫も他人の家か或は又人も見ず、我が所天も見ざる場所ならば兎も角、我家に招き、諸人一樣に待做さねばならぬ場合に、彼れが其中に交り居ては我が樣子を隱すにも隱されず、逃るにも其場所無し、唯だ彼れを招かぬ事にする一方なれども、我所天の淺からぬ友達を、我手段にて招かぬ事にする道も無し、如何にせんかと思案さへ定らぬに、此翌日は又此事の相談初まり、公爵の言葉にて斯る場合の接待は、成る可く夫人の自筆にて認むるより良きは莫しと云ひ、外の分は孰れにするも伯爵、李羅子、春人の三名に送る分だけなりと、自筆にて認

めよ、殊に和女の手蹟は今時に珍しきほど見事なればと、達て勸らるゝにぞ、是も亦辭むに由なく、唯だ春人に公爵の新夫人が己の曾て辱めたる韋倫なりと悟られぬ樣、手の風を變へて書き、辛くも我が役目を果したり。

事茲まで押し寄せては、唯だ先方に何かの都合ありて、此招きに應じ兼ねることゝ爲るを賴むの外なし、切めては春人だけなりとも、病氣か何かの故障あれかしと、只管ら心ろに祈りたれど、願ひ通りに爾る故障の起る筈なく、殊には美人の評判高き新公爵夫人が、初て交際場裡に打て出る披露とて、到る所に言囃され、之に招かれぬを恥とする程なれば、翌日より續々到來する返事に、一通だも斷りは無く、皆、

「一方ならぬ譽れと存じ、何事を差置きても參上せん」

など記し、其中に春人よりの分も有るにぞ、韋倫は今は是までと覺悟して、此上は我が心

を絲固め、彼れ春人の前に出て一歩も後を取らぬ樣、習ひ覺ゆる外なしと、今更らの如く春人が我身に加へし辱しめの數々を我心に呼起し、春人が現に我前に立る如くに想徹して、彼れを眼下に見降さんとするに、我顏赤み我が身體震ひ、唯だ彼れに見降さるゝ如き思ひするのみ、我身は最早や彼に弄せられし園墩氏の韋倫に非ず、英國女流の最上位を占る五田公爵夫人なるぞと、我心を勵せども其甲斐無し、憎む可き彼れの力、今も猶ほ我身の上に及ぼし、我が力に勝てるにやと思へば、悔しさ遣る方なけれども悔し乍らも彼れに敵せず、彼れを罵り言懲して分れたる其時の腹立しさは、悉く我胸に浮び來れと、腹立ながらも詮方なし、十度び廿度び、同じ奮發を繰返し、何うやら幾分かは彼れに勝得る如き氣のせらるゝに至りしかど、今眞に彼れ春人が我前に立てりと思へば、其心又鈍り、震はじとすれど自から身の震へり、如何にせん、如何にせんと、唯だ心に燥るうち早くも其日と爲

り、其刻と爲り、招きたる客續々と入來り我身は接待室に引出されて、親しく其人々を案内する事とは爲りたり、案内しつゝも今にも彼れが來りはせぬかと思へば、忽ち總身の寒きを覺ふ、我身は斯までも心弱きか、自ら叱り勵せども其勵す心よりして、既に彼れ春人に呑込れたる心地して、最早や逃隱るゝ外なきかと怪む折しも、曾て我を欺き我を嘲りたる彼れの聲、我所天公爵の聲と共に笑ひながらに、廊下より我が方に聞え來る、一歩は一歩よりも近し、眞に其身の措所無しとは、韋倫の此時の心なるべし。

三二

唯短き一轉瞬の間に、生涯よりも猶ほ長き苦みを受る事あり、公爵夫人韋倫が此時の苦みは、實に他人の一生涯の苦みを搔集めしより猶ほ辛き苦みなり、一歩は一歩より近き、

彼れ春人の足音は、一歩一歩に我が胸を踏附て、我が腹を蹂躙るかと疑はる、ァ、如何にせん今玆を逃去らずば、彼れと顔見合せて、我身は必ず支ふる能はずして悶絶せん、去ればとて逃隱る可き場合に非ず、逃隱る可き場所は無し、時しも再び聞ゆるは所天公爵の聲にして、

「サァ皆樣を、私しの妻にお引合せ致せませう」

と云ふ命の窮、運の盡なり、何とかして我心に充分の勇氣を引起す手段は無きか、彼れ春人は我身の畢生の敵なるぞ、我身を貴族の妻たるに足らぬ女とし、辱めて社會の底に蹶落したる大賊なるぞ、我身は今や彼より幾段の上に立ち、此國に又と無き公爵の夫人にして、彼れを足許に鰭伏させる身分なるぞ、彼に恐れ、彼に羞ぢ、彼れに戦ぐ如き腐甲斐なき振舞の有る可けんや、彼れをこそ我が前に戰かせんと、心を吃り氣を引立て、强て身を正し

立上りしも、踏む足さへ定まらず、微かな風にも吹倒されやせんと、自ら危ぶまるゝ許りなるにぞ、詮方なく足場を圖り、中央に在る活花臺の傍に立ち、左の手を臺に突きて漸く其身を支へたれど、腕より胸一面を露出したる禮服の事とて、高く打つ我が動悸は波の如く畝を爲し、隱さんにも由無ければ、右の手に持つ扇子を擧げて胸の半を蔽ひ、是ならばと身を繕ひて控ゆる心は、斷頭臺の上に座し、首差延べて冷たき刀の落るを待つ、罪人の心持より猶辛かる可し。

去れど上部より見し有樣は、實に是れ生れながらの公爵夫人なり、扇一片隔てたる胸の中は人知るに由なし、絹と編緣を束ねたる其裳は、霓裳の如く長く引き、顔は此世に又と無からんと思るゝ美しさの裡に、天女の如き慈愛あり、女皇に優る尊さあり、稀代の珠玉を鏤めたる飾物は、其手首を初とし衣服の一面に輝きて四邊を照し、優かなる其態度は壯

大なる室内の備附に釣合て、此美人を斯く立せんが爲に此室を斯く作りしかと疑はれ、唯靜に、唯落着て見ゆるのみ、如何なる場所に据らしむるも其場所に能く似合ひて、少しも場劣のせず、見劣のせぬ眞の美人は、實に此韋倫の如き者なるべし。

足音は愈々近づき、遂に此室の入口まで來れり。韋倫の姿益々靜なるに引換て、心は益益打騷ぐのみ、足音と共に又聞ゆるは彼れ春人の笑ひ聲なり。

ア、笑ひ聲、笑ひ聲、彼れが我身を眞の妻に非ずと嘲りたるも此聲なり、我身が今も猶ほ其辱しめを忘れずして、斯くまでも苦むに彼れ一點の後悔も無く、其忌はしき笑ひ聲を絶ざるかと思へば、今まで彼れを恐れたる腹の中に、異樣なる怒を催し來り、戰ぐ身體も戰きを止め、騷げる胸も騷ぎ止みて、兩の頰熱きを覺ゆる迄に血色を浮めたり、今が今まで幾度も自ら勉めて、自ら怒りしも其怒りは眞の怒りに非ず、到底彼れ春人に敵し得んと

は思はれざりしに、唯だ彼れの笑ひ聲を聞きしのみにて、心の猶底に横はる眞の怒り、忽ちに現れし者なるか、來らば來れ、最早や何をか恐れんやと、一度は安心して窃にホット息を繼ぎたり。

去れど安心は唯一時なり、怒りて赤みたる我顏を彼れに見られん事、我が願ひに非ず、再び彼れに逢ふ時は彼れを眼下に見降して、斯までも我身に賤まるゝかと、彼れ自らに思せん事初めよりの決心なり、怒るにも猶ほ彼れを重く見るに同じからん、怒るにも、恨むにも猶ほ足らぬ彼れを、蛆虫同樣に極冷かに、極餘所しく無慈悲の人が路傍の乞食を視る如く蹶下して彼を見ん、他人には分らずとも彼れが心には必ず分らん、彼れの顏、彼れの姿、彼れの言葉、少しも我が心を動すに足らずして、彼れ全く度外に置かれたるを知らば、彼れ幾分か不快の念を起さざらんやと、心に斯く思へども彼れを度外に置く能はず、取る

にも足らぬ蛆虫と見る能はず、嗔の焔は益々顔に燃上り、思へば思ふに從ひて彌が上にも我が兩頬の赤むを覺ゆ。

茲に至りては取直す暇も無し、早や彼等三人、我所天に連られて我が前に立てり、韋倫は彼等の顔、殊に彼れ春人の顔を見んとして見る能はず、宛も少女の羞ふ如く、其眼自から垂れて地に下り、長き睫毛は深く其目を鎖したり、春人を見降さんとして見降す能はず、却て彼れに耻しき我が樣を見らる、何等の言甲斐無き我心ぞ、獨り我身を叱るうちにも春人が驚きて穴の開くほど我顔に見入れること、何と無く我靈魂に寫りて分れり、彼れの視線は眞直に我が垂たる眼の上に注ぎ、我瞼を燃くに似たり、是れ唯だ一秒時にも足らぬ間なれど、韋倫の身に取りては一年よりも猶ほ長し、彼れ恐しきまで我を眺めて恐しきまで靜かなり、頓て聞ゆるは我所天公爵が、彼れの妻李羅子を第一に我身に引合す其聲な

り。

「斯う打解けた間柄で、何も四角張た紹介は要らぬ、サア李羅子さん、是が今度の公爵夫人です、何うか姉妹の樣に思つて互ひに仲能く交はッて下さい」

と云へり、李羅子と云ふ一言は韋倫の燃る心に氷より、猶冷たく感じたり。ア、李羅子、是が我身より春人の心を奪ひ取りし女なるか、春人が我身に見替しは此女なるか、此女夫ほどに我身より立優る女なるか、斯思ふと共に今まで燥りても出ざりし、餘所々々しき心俄かに出で、怒りは直ちに賤みと爲り、赤き顔は白くなれり、此女まで我身を辱めし片割なるに、我身此女の所天を見降し得ぬ筈なし、我身と此女の優劣を今は較べるの時なりと忽ち異樣なる決心を生じ來り、誰にも臆せぬ晴やかなる笑を浮べて李羅子を見、其序での餘る眼にて最冷かに春人の顔を見たり。

女と女の間には必ず相凌ぐ心あり、日頃は此心左まで強しとも思はれねど、折に觸れては怪きほど強くなり、唯だ負けじ、凌がれじとの一心より、意地と爲り我慢と爲り、悲しき時にも冷然として笑ひ、燃るほど悔しき場合にもズッと澄して控ゆる事ありとかや、韋倫が唯だ李羅子の名を聞きしのみにて、今まで鎭得ざりし我心を忽ち鎭め、少しも今までに李羅子の名を聞きし事無きが如く笑しけに挨拶し、續て最冷かに、最平氣に春人の顏を見しも卽ち此心の所爲なるべし、李羅子は勿論、韋倫を知る筈なく、我身が韋倫に何とか思はれ居るならんなどとは猶更ら思ふ由無ければ、成るほど噂に優る美しき夫人とのみ思ひ、良き友達を得し如き心にて益々親く交らんものと、

「此樣な方と睦しくするなト仰有つても、睦しくせぬ事は出來ません」

と笑を返せしも、春人は心に深き傷あれば、李羅子の如く自然の打解たる體を粧ふ能はず初て公爵夫人を見し其時に早くも韋倫なりと知り、我が踏む地底の動くかと思ふほど驚きしも、又見れば六年前に分れたる韋倫よりも、一入の立優りたる所あり、其時は美しき嬢と云ふ丈なりしも、今は優に交際社會の上に立つ可き品も、位も備りたる、眞の美人なり、泣て我前より退きたる韋倫が、世に知己も近附も無き身を以て、何うして公爵夫人とまで成出しかと思へば、唯だ怪むの外は無く或は韋倫と同じ顏、同じ姿の別人にやと迄に訝り、瞬瞬も爲し得ずして其顏を眺入るに、公爵夫人は何の恨みも、何の厭味も現さず、唯だ初對面の珍客を扱ふに、最も當然なる打解ぶりにて、天然自然の笑を浮めて李羅子に挨拶するにぞ、春人は愈々以て合點行かず、曾て我口より李羅子の名前を聞きしのみか、李羅子を恨

みて、

「血を見る敵」

の短劍まで送りたる韋倫には、此眞似の出來る筈なしと思ふうち、公爵夫人の眼は我方に轉じ來り、劍の刃に置く霜よりも、猶ほ冷かに輝きたれば、今の公爵夫人、全く昔の韋倫なるを知りたれど、挨拶せん我が言葉は腹の中にて凍りしか、言はんとすれど、口には出でず、交際上手と噂さるゝ日頃の技倆に似も遣らず、最と不束に聞きも取れざる調子にて、何言をか呟きて間に合し、更に心を勵して明に言補はんとしたれども、其時は公爵夫人、早や我れに顔を負むけ、李羅子の父是蘭伯爵と親しけに語ひ居たれば、如何とも詮方なし。此時初て春人は交際場裡に引を取たる事を思ひ、扨は韋倫我身を待設けて故と我身を冷淡に取扱ひ、其身が我れより遙に上なる事を示せしか、彼れの心早や我を何とも思は

ず、我を見ず知ずの他人の如く扱ふに至りしかと、限無き不快を感じたるも、遲れし後にて詮方なし、韋倫も一旦は思ふ通りに心を落着け、思ふ通りに春人を扱ひたれど、心の中の苦さは一方ならず、若し春人と長く談でもせねばならぬ如き場合に迫れば、殆ど堪得ざるならんと氣遣はるゝにぞ、成る可く彼れと接近せぬに如くは無しと思ふうち、頓て晩餐の刻となり、彼れと食堂に落合たれど、幸ひ餘程離れたる所に座したれば、彼れは彼れ、我れは我れ、互に言葉を交ねばならぬ事も無く、是だけは先づ安心して、我身は公爵夫人と云ふ其位地に恥ぢぬ爲め、談話の中心と爲りて充分に勉むるに、來客孰れも夫人の才に感じ、五十年來交際社會に、斯る夫人の出し事無しとまで云ひ、打寛ぎて興に入しも、春人のみは氣に掛る事多き爲か、日頃ほど面白けに見えず、唯だ人に悟られじと、勉めて語り、勉めて笑ひ抔すれど、其語其聲眞實の心の底より發するに有ぬ事は、韋倫だけには能く分

れり、食事も無事に終り、夫人連は先づ玆を退く事と爲り、韋倫は止む無く春人の傍を通りしに、其時偶然にも身に附けたる花束の中の一輪、春人の前に落しを、春人は今や韋倫が我に向ひて何とも感ぜぬや否を試し見る時と思ひし如く、其花を拾上げて、韋倫に差出すに、韋倫は纔に見向き、

「毀れ掛た花束ですから、一輪二輪散たとて構ひません」

と此上無く餘所々々しく言ひ、手にだも觸れず、宛も猛き虎が、鰐伏す羊を横目に見て通り行く如く、悠然として其所を通り過たり、頓て次の間に入り、椅子に身を卸す間も無く、李羅子も來り、是蘭伯も來り、續て春人も玆に來りしが、韋倫は成る可く是蘭伯にのみ話し、時々は又李羅子に振向ども、春人には口を開く場合を與へず、是蘭伯は深く韋倫の才と容貌とに感じ、

「イヤ五田公爵が生涯の第一の手柄は、實に二度目の婚禮です、到底人間の力で見出す事が出來ぬほどの夫人を見出しましたから」

など云へど、李羅孃は流石に女だけ、公爵夫人が何とやら我所天に、餘所々々しきに似たるやを疑ひ、孰れの席にも人に疎ぜられし事なき春人なるに、何故公爵夫人にのみは氣に入れぬにや、今少し二人を親しくせざれば交りの興味も薄しなど思ひ、二人を暫し此所に殘し置き、隔ての氷を解かしめんものと、夫とは無く父伯爵に向ひ、此度公爵が羅馬より取寄せたる繪畫など見ん爲に、美術室へ行かんと云ふにぞ、韋倫は、

「私しが御案内します」

とて立掛るに、李羅子は之を留め、

「イエ貴女は春人に、貴婦人の前へ出て談話する心得など、教て遣て下さいまし」

と笑ひ乍ら、早や伯爵と共に立去りたり。韋倫は此席に主人たる身として、客の請に負き續て立つも端下なしとは思へど、茲に春人と共に殘さるゝは何より辛き事なれば、機を見て立んと思ふ間も無く、早や我が耳の背後の方に、異樣なる細語き聲あり。

「韋倫、韋倫、イヤ、今は五田公爵夫人、子爵西富春人に一言の言聞せる事は有ませんか」

と云ふ。アヽ、春人は其汚はしき口を開きて、再び韋倫に物云はんとするか。

三四

四邊に人の絶えしを見て、公爵夫人を呼掛る春人は何の心ぞ、彼れは公爵夫人の心中に猶ほ昔の愛の殘れるならんと疑ひ、再び其愛を引出さん所存にや。

彼れ昔し韋倫を弄したると、同じ優しき調子にて、

「コレサ、韋倫誰も居ぬのに、爾う餘所々々しくする事は無いぢやァ無いか」

と云ひ椅子を此方に振向たり。韋倫は此聲を聞きたるにや、聞ざるにや、其靜なる顏は彌が上にも靜にして、何の色、何の氣合も現さず、唯だ泰然として落着たるのみ。

「コレサ、韋倫コレ」

再び呼ぶ其聲は、前よりも一入の熱心を帶びて聞ゆれど、寛ぎて控へたる韋倫の樣子は少しも變らず、胸に仙禽の羽毛を以て、最細かに編成したる扇を當て、安らかに此身を椅子の背に凭せて、扇の羽毛一本だも動かさず、顏の艶、眼の澄、總て唯獨り我居間に息める時の通りにして、我身の外に人あるを忘れ、人に對して我身有るを忘れ、心に一物の侵し入る者無きに似たり、併し韋倫にして、今まで一たびだも此人に逢し事あらば、顏の孰れかに見覺の色を現し、隱さんにも隱し果せぬ所ある可きに、他人も他人、犬猫よりも猶

ほ取るに足らず、猶心に留めぬ他人を視る如く、唯だ穏かに控るのみ、暫くにして韋倫は我心の全く治り最早や如何なる言葉を聞くも、絶て動かん恐れ無しと見極めしか、春人の方に振向き、

「アヽ貴方は西富子爵でしたネ、繪畫室へでも御案内致しませうか」

と云ふ其聲は、公爵夫人に似合しき騒ぎも震ひもせぬ聲にて、其言方は今まで我傍に此人あるを忘れ居て、初めて思ひ出したる言方なり、春人は叫ぶが如くに、

「コレ韋倫、夫では餘り餘所々々仕過るぢや無いか、タッタ一言、優い言葉を掛て呉れ、其樣に扱はれては、私は本統に氣が違ふヨ」

韋倫は澄やかなる目を太く開き、云ふに言れぬ程の賤みを現して、春人の顔を見下しつ、

「西富子爵、若し私しへ仰有るならば相當の言葉が有ませう、私しは唯の韋倫では有ませ

ん五田公爵夫人です」

「誰で有ふと爾餘所々々しくせずとも好らう、今は公爵夫人でも韋倫だ、韋倫だ、元は團墩の姓を名乗た韋倫だ、決して私と他人で無い、他人に成たくも成らぬ譯が有る」

韋倫は輕く笑み、

「オホ、世の中に私しと貴方ほどの他人は、又と有りますまい」

と云ひ捨て、其儘玆を立去らんとするに、春人は引留めん一心にて我を忘れし如く、遽しく手を延べて、韋倫の手を捕へしが、捕ふると共に忽ち我身の過ちを悟りたり。

韋倫は毒蛇にでも螫れし如く、春人の手を拂ひ退けて、眞の公爵夫人の外は、眞似も出來ざる威高き怒りを現して、無言の儘春人を睨み附たり、何人に睨まれしとて、夫を恐る

る如き春人ならねど、唯だ韋倫の睨にのみは我知らず縮み込み、急に言葉を改めて、

「イヤ御免下さい、若しや貴女が立去るかと思ひ、我知らず無禮を働きました」
韋倫は猶ほ怒りの鎭らぬ顏色にて、
「氣をお附け成さい、再び私しの身に指一本觸る事が有れば、其儘に濟しませぬぞ」
春人は韋倫が唯だ公爵夫人と云ふ、其名のみ我より上に在るにのらで、其の天性の品位、亦遙に我より上なるを感じ、是よりして復た今までの慣々しき言葉を發する能はず、
「イヤ二度と再び無禮な事は致しませんが、夫にしても貴女は眞に私しを發狂させます、貴女には心が有ませんか、情と云ふ者が有ませんか」
訴ふるが如く詰れども、韋倫の樣子は少しも動かず、唯だ侵し難き貴高夫人の風采あるのみにて、何の返事だに與へざれば、春人は猶叫び、
「貴女は最う忘れましたか、私しが早や忘れたと思ひますか」

韋倫は漸くに、口を開き、
「忘れる事も覺えて居る事も何にも有ませぬ、貴方は子爵西富春人、私しは五田公爵夫人、二人の間に何で忘れるの、忘れぬのと云ふ樣な事柄が有ませう、全くの他人ですのに」
「何と仰有つても忘れる筈が有ません、忘れられる樣な輕い事柄とは事柄が違ひます、忘れたと仰有れば、私しが思ひ出させます」
韋倫は再び太く眼を開き、再び睃みを帶びて彼れを見降し、
「左樣、忘れた方が貴方のお爲でせうか、私しの誓ひ丈は覺えて居ます、韋倫の此言葉をお忘れ成さるなと云た、其復讐の誓ひだけは」
と徐り徐りと云來るに、春人は復讐と云ふ恐しき言葉に、其時我身の罵られし數々の言葉を、一々に思出せしか、殆ど顏の色を失ひ、蹙み込まぬ許りの樣にて、

「エ、復讐、復讐の誓ひ？」

「ハイ私しは貴方の目の前で復讐を誓ひました、今も其誓ひを忘れません、遅かれ早かれ一度は其時が來ませうから、必ず其誓ひを忘れません、ハイ復讐の屆く迄は決して其誓ひを忘れません」

昔し彼れが前にて誓ひたる其言葉に比べては、百分の一にも足らざれど、今の言葉は其時の言葉より、春人の心には殆ど百倍にも應へたり。

三五

復讐の意を繰返す、韋倫の言葉附は靜なれども、爭ひ離き決心の樣子あるにぞ、春人は薄氣味惡く、成る可く賺し宥むるに如くは無しと思ひしか、媚るが如き語調にて、

「ダッテ貴女は公爵夫人と云ふ、社會第一の地位を得たでは有ませんか、私しが何れ程實意を盡しても、貴女を是ほど出世させる事は到底出來ぬ所でした、是を思へば私しと離れたのが、貴女の眞の幸ひと云ふ者です、此位地に滿足せず、猶ほ復讐などと云ふは餘り執念が深過ませう、最う大抵にして」

と言掛るを、韋倫は聞きも終らず、

「ナニ貴方の意見を聞くに及びません、聞たくも有ません」

と矯めて早や立去らん樣子なるに、春人は猶ほ悲けなる聲を粧ひ、

「夫にしても貴女は、私しを犬猫か何ぞの樣に、慈悲も情も無くお扱ひ成されますが」

と言來れど、韋倫は唯だ眼の一轉にて制し停るに、春人は最早や情に訴ふるも無益と見てか、更に調子を改めて、

「イヤ公爵夫人、私しの唯一つのお願ひですから、何うぞ仕舞まで聞て下さい、御覽の通り當家と私しの家とは淺からぬ間柄で、屢々往來もせねば成ませぬが、當家の夫人が私しを恨みにしては私しの位地が何よりも難儀です、來て好いか來て惡いか、居るが好いか歸るが好いか、自分で自分の位地が分りませんから」

「イエ當家には、貴方が自分の地位なぞと云ふ程の地位を貴方に與へません、私しに恨れるが辛くてお歸り成さらうと、夫とも玆にお在で成らうと、當家は總て其樣な事を度外に置きます、犬猫の出這入に一々氣を留る家柄では有ませんから」

と眞に犬猫同樣に言放たれ、是には春人も火と怒の色を顯はしたれど、怒るにも怒られぬ場合なれば、漸くに自ら落着き、

「イヤ爾仰有つては困ります、實は貴女が立去た後、貴女の身を氣遣はぬ日とては無く、

既にアノ別莊なども其後一年餘りの間、今日にも貴女の歸る事かと、其儘に仕て置た程です、其後五田公爵が巴里で婚禮した事は聞ましたが、其夫人が貴女で有うとは實に夢にも思ひません、少しでも貴女と疑へば、私しは決して此席へ來ぬ所でした、知ずに來て貴女と分り、逃出さうかと思ふ程に驚きましたが、兎に角貴女の口から聞く丈の事を聞ねば逃出す事も出來ません、第一公爵が貴女と私しの間に、深い祕密の有る事を知て居るのか知ぬのか、知て居るなら一刻も私しが、此家に留る事は出來ず、知らぬならば何も逃出して疑ひを招くと云ふ愚かな眞似も出來ませんから、エ夫人、公爵が知て居ますか、知ずに居ますか、唯是だけを聞せて下さい」

「知て居るも知て無いも、總て公爵の事です、貴方が聞くには及びません」

「イエ及びます、知て居るなら私しは後とも云はず、今此席から立去ねばなりません」

韋倫は侵し難き色を示して、

「貴方は自分の汚はしい心を以て、私しの所天、五田公爵を計ると云ふ者です、公爵が若し貴方の汚はしい罪を知れば、初から貴方を寄つけません」

「では何にも知りませんか」

「イエ私しは、所天に物事を隠す心は有ません、何も彼も打明て有ります」

「エ、エ、何も彼も打明けて」

と春人は顔色を失ひしも、猶ほ合點の行かぬ所あり。

「貴女は本統に私しを窘めると云ふ者です、明かに言聞せて下さい、公爵は何れほど知て居ます、夫を聞せてさへ下されば、私しは唯だ貴女の言附次第、此家へ來るなと云へば參りません、再び貴女の前へ出ぬ樣にでも何の樣にでも致します、エ公爵は何れほど知て居

ます、是を聞せて下さる丈の親切が貴女に無いとは思はれません」

「オホ親切、私しと貴方の間に何で親切などと云ふ事が有りませう、ハイ少しも親切は有ません、併し此祕密は、元が貴方と私しの間に出來た祕密ですから、唯だ心得までに、今何う成て居るかと云ふ丈聞せて上ませう」

「ハイ何うぞ、何うぞ」

「私しは貴方の家を出て直に父の許に歸り、何も彼も打明ましたが、父は一方ならず立腹し、目附け次第に貴方を殺すと云ましたが、唯私しが貴方の名を知さぬ爲め詮方なく其儘に止ました、間も無く父は五田公爵の賴みを受け、羅馬の古宮を修復する事に成ましたから、私しも父と共に其古宮へ行たのです」

「分りました、〳〵」

「爾すると其古宮へ公爵が來て、私しに妻に成れと云ましたが、公爵は貴方の樣な小捷い智慧は無く、僞の婚禮などは思附かず、唯貴族として耻しからぬ、昔からの仕來りの通り、私しを表面本統の公爵夫人に成ぬかと云ひました」

と初て一種の嘲りを現すに、流石の春人も之には堪得ず、我知らず其顏を蔽ふに、韋倫は語を繼ぎて、

「爾云はれましたけれど、今までの我履歷を隱し、所天たる可き人を欺いて婚禮しやうとは思はず、返事する前に何も彼も打明けました」

「エ打明けました、夫は非常な奮發です」

「何の奮發で有ませう、唯だ人間の道を盡すだけです、之を隱してこそ人間以外の、左樣、貴方の樣な鬼々しい心が要るのです」

と灸所に一々釘打てど、春人は何と云はるゝも爭ふ能はず。

「私しは隱す力が有ませんから悉く打明けて、公爵の判斷に任せました、爾すると公爵は私しの身に露ほども汚れは無く、汚れは總て其瀆した男の身に着くのだと云ひ、早速私しを公爵夫人に仕たのです」

「ですが、私しの名前まで話ましたか」

「イエ公爵も私しの父と同じく、其男を探し出し充分に罰して遣ると云ました、けれども、私しは自分の仇は自分で打つのが道だらうと思ひましたから、名前ばかりは知せませんでした、自分で復讐の見込が無ければ、切て父にでも所天にでも貴方の名を打明けて、仇を返して貰ふかも知れませんが、私し一身の敵は充分一身で打つ事が出來ますから、誰にも知さ無いのです」

と少しも騒がず述來るは、深く心に頼とする所有る爲めならんと、春人も私に恐れを催したり。

三六

春人は猶ほ何とかして夫人の恨を解かん者と、

「併し夫人、最う過去た事はお互に忘れて仕舞ひ、新に打解て交るのが幸ひでは有ませんか、貴女が爾うして下されば私しは總て貴女の言葉に從ひ、充分貴方の滿足する樣に致しますが」

韋倫は相も變らぬ決心の樣子にて、

「復讐を果す外に滿足の道は有りません、夫を果さずに何うして過た事か忘れられませう」

「私しが何れほど願ても」

「ハイ何とお願ひ成ても了ません、昔貴方と分れる時に、此後貴方が私しの前に泣伏して、何うか助けて呉れと命懸で願ふ事が有ても、決して私しは助けませんから、其時に思ひお知なさいト、私しは言渡して置きました、今に其時が參りませう」

眞逆に此女の前に泣伏して、助けを請ふ如き時の來る可しとは思はねども、斯まで嚴しく言はるゝは男ながらも何と無く恐ろしければ、今一度と聲を切にし、

「昔し愛しもし、愛されもした仲で、爾まで憎まずとも好でせう、貴方は昔の愛が少しも殘つて居ませんか、寢覺が惡くは有りませんか」

韋倫は殆ど傲然と身を構へ、

「何で昔の愛が殘て居ませう、恨の外は何にも殘つて居りません、思ひ出すさへ胸が惡い

程ですもの」
「でも少しの未練は」
「イエ少しも」
何と云ひても打解ん見込無ければ、春人は暫し考込みし末、
「夫にしても貴方が上部に出して、私しへ餘所々々しくするのは決して得策で有ません、上部は何處までも通例の友達の樣にせねば、第一公爵が怪みます、夫に貴女の父も此頃は此屋敷へ來て居ますから、貴女が分けて私しへ辛く當る樣子が見えれば、必らず夫と悟ります」
「其樣な事は貴方から敎はるに及びません、勿論復讐は私し一人の復讐で、父にも所天にも知せては成ませんから、上部だけは誰にも怪まれぬ樣、外の方と一樣に貴方へ附合ひま

す、爾して復讐の時を待ます、貴方は上部だけ一樣に附合て吳れるのを有難いと思ひ、夫に滿足して居る外は有ますまい」
云はれて春人は少し安心の樣子にて、
「ハイ何うも致方が有りません、切ては夫だけに滿足しませう」
「上部は人の怪まぬ丈に附合ひますが、心は何所までも血を見る敵ですから其お積りで」
血を見る敵、此一語に春人は又驚き、
「ア、夫で思ひ出しましたが、私しが婚禮の時、李羅子へ向て、血を見る敵と云ふ、短劍形の留針を贈たのは貴方でせう」
と問掛るに、韋倫は少しも騷がず、
「今更らお問成らずとも、私しと云ふ事は其時から分つて居ませう」

「分つて居ますが、貴方にも似合はぬ邪慳な振舞では有ませんか、私しを恨むのは仕方が無いとして、妻の李羅子に何の咎が有ますか」

「爾云ふ貴方は、咎の無い者を害した覺えは有ませんか、貴方を敵と狙ひながら、貴方の妻と眞實に打解ると云ふ事は私しには出來ません、貴方の身に痛みを及ぼす事が出來ると見れば、誰を害するか知ませんから、其お積でお在なさい」

春人は又も初の不安心に立返り、

「貴女は實に私しを嚇します、昔しブランリーの川沿で逢た時は、蟲も殺さぬ憐み深い令孃で有ましたが」

「ハイ其頃は惡人に欺された事が無く、心に恨と云ふ事を知ませんから、其後貴方に恨と云ふ事を敎られた、今の私しとは大變な相違です」

春人は熱心に、

「イエ其樣な事は有ません、貴女の天性が少しの間に爾まで違ふとは思はれません、貴女は唯だ私しを嚇す爲めに、其樣な事を仰有るのです、私しを恨むが爲に罪も無い妻にまで、其恨を及ぼす樣な、其んな邪慳な事を成さる貴方では決して有りません」

と打叫ぶ、其心は唯だ我妻を庇護はんとする一心と見えたれば、韋倫は女心に、又今更の如く悔さを催し來り、

「何とでもお思ひ成さい、分る時が來れば分ります」

と云切りて、最早や座にさへ堪ざるか、動く我身の顏色を隱し得ざるか、春人が引留る暇も無く、立上りて此室より歩み去りたり。

歩み去る其姿の爽かなるは、唯だ交際社會を足許に平伏させ、到る所に尊敬さるゝ夫人

ならずば、眞似も出來まじと思はるゝ許りなるにぞ、春人は恍惚として見惚るゝ裡に、心に今まで覺えも無き異樣なる後悔の念を催し、

「ア、李羅子に心を移した日は、我が生涯の惡日で有た、死ぬまで此苦みは免かれぬ」

と呟きたり。

何時まで玆に在る可くも有ねば、春人は其後を追行くに、早や韋倫は李羅子、是蘭伯などと共に繪畫室に在り、李羅子と立並ぶ韋倫の姿を見れば、孰れとして李羅子に優らぬ所なく、人間より一段上に位する美人かと思れ、何とやら近づき難き所あるにぞ、春人は正面より韋倫に向ふ能はず、縱に我妻李羅子に向ひ、

「美しい繪が、澤山有るだらう」

と云ふに、李羅子は笑ながら、

「美くしい物と云へば、公爵夫人の姿ほど美しい者は有ません、貴方は夫人と大層話が合たと見えますね、餘り長いから私しなどは、最う繪畫を見て仕舞ひました」

と云ふ、其言葉は嫉妬に非ず、邪慳に非ず、唯だ心に浮ぶ儘を罪も無く言ひ現す者なれど、春人は返事に困り、

「和女でも夫人と少し談話をすれば、時の移るのを忘るよ」

と云ひ、窃に夫人の樣子を見るに、夫人は何の祕密も知らぬ如く、其顏は晴渡り、其態度は侵し難きほど靜かなり。

是より幾時の後、一同は客室に落合ひ諧ふもあり、音樂臺に上るも有り、各々興に入りたるが、此時春人は妻李羅子の請に從ひ、韋倫に向ひ、何なりと諧ひて聞されよと乞ふに、韋倫は辭みもせず、

「李羅子さんのお願ひならば」
と云ひ、早速立ちて音樂臺に上り、優かなる音調にて謠ひ出るは、昔し春人と共に在りし頃、毎日の如く謠ひたる其歌なり、外の客は唯聲の美しさに感じ入るのみなれど、獨り春人は韋倫が何故此歌を謠ふやを知り、其心に最早や我れに對する一點の愛も未練も無く、此歌を唱へても、其聲少しも曇らぬ事を示さんが爲めと悟り、益々不快を催したり。

三七

韋倫は斯の如く、漸く春人を見降し得るに至り、心私に喜びたれど、是に引代へ春人は不快の想ひに堪へず、去ればとて又韋倫の心を動し、昔の怨みを忘れしむること殆ど思ひも寄らざれば、今は詮方なし、彼れ我に餘所々々しければ、我れ亦彼れに餘所々々しくせ

ん、客と女主の間に於て、角芽立つ事は出來ざれども、我れ打薺ぎては彼れ益々勝誇る道理なれば、我れも唯だ彼れを度外に置き、彼れより何と仕向らるゝも、我は痛しとも痒しとも思はず、彼れを取るにも足らぬ小兒の如く兒做し置かば、彼れも心に樂きを得ざらんと、斯思ひ定めたれば、是よりして再び韋倫の機嫌を取らず、時々は言葉など交す事は有れど、夫も唯だ一通りの挨拶にして、成る可く我心の平氣なるをのみ示す事と爲りたれば、韋倫は女心に早くも夫と悟り、春人を憎むの心又一入強くなり、何とかして充分彼れの心を苦しめ、我が復讐を仕果せる工夫は無きやと、寢ても覺ても夫のみを考ふる程と爲りしも、心無き人の心を苦むるは、目の無き人の目を潰さんとする如き者にて、其の工夫の浮かばぬも詮方なし。

其中に早や一週間の餘を經て、客の逗留する期限も盡き、春人夫婦も他の客と共にサク

ソン宮より歸り去りしが、是より凡そ一月の後、朝廷にて例年の大宴を催さるゝ事と爲り、韋倫は公爵夫人として其所天と共に、第一に參會を仰付られたれば、一畫工の娘にして斯くまで出世なせしかと、我ながら夢の如く、玆を晴ぞと着飾りて朝廷に出たるが、此時再び春人夫婦と同席せしも、宴會の盛なるに紛れ、互に嫉を現し合ふ暇も無く濟たるが、是よりして公爵夫人韋倫の名は、英國の上下に響き渡り、交際上裡第一の美人として女王の如く崇められ、韋倫の望む宴會には招待せらるゝ人、身に餘る譽れとし、爭ふて出席し韋倫が公爵と共に芝居見物に行くと云へば、前々より上流の新聞紙に披露せられ、其夜は必ず木戸に大入の札を掛け、遲れし人を遮絶する程の勢ひと爲りしが、或夜の芝居見物に、韋倫は何心なく場中を見廻すうち、一方の棧敷に當り、我眼に何とやら物恐ろしく覺らるゝ一人の顔を認めぬ。是れ何者ぞ、其の物恐しきは何が爲ぞと、自ら疑ふまでも無く、韋倫

は直ちに思出せり、是なん、曾て春人が僞りの婚禮を以て我身を欺き果せし時、春人を助けて我身に夫婦の誓を言渡せし僞僧なり、其名前、馬淵春介と云へる事は其後春人に問ひて知れる所にして、今も猶ほ其の怖らしき顔と共に、我が心に鮮かなり、其時の僧服を被し彼れの姿と、今の紳士風を爲せる彼れの姿と、一方ならぬ相違あれど、其の惡相は見擬ふ可くも有らず、韋倫は意外の所にて回り逢ひし者なる哉と、一時は我顔色を制し得ぬほど驚きしも、彼れも敵の片割にして、酬ゆ可き恨あり、今逢しは幸ひなりと、我驚きの靜るを待ちて、夫とは無しに傍なる所天に問ふに、

「オ、彼れか、彼れは先年是蘭伯爵が春人に賴れたから、何かに取立て遣て呉れと云ひ、私の所へ賴で來たから、私が領地の租稅局へ雇ふて遣り、一年八百磅ほどの俸給を遣つて有る、今も猶ほ喜んで其役を勤めて居る樣子だが、何でも春人の學校友達か何かで有う」

と公爵は答へたり、扨は我身を欺きたる褒美として、春人が彼れを是蘭伯に頼み、伯より公爵に周旋して位置を得させし者なるか、彼れを相手として、恨を酬るは身分として大人無き業に似たれど、彼れが如き悪人を許し置きては、此後に又如何なる禍ひを人に加ふるも知れざれば、充分に懲しめて呉れん者と、韋倫は早くも思定め、

「貴方にお願ひが有りますが譯を聞かずに叶へて下されませうか」

と細語くに、韋倫の云ふ所は細大と無く、云ふが儘に聞從ふ公爵なれば、

「何なりと」

と熱心に答たり。

「貴方が彼れに其位置を與へたならば、貴方の力で又其位置を取上る事も出來ませう」

「出來るとも」

と公爵は言掛しが、夫人の身に似ぬ異樣なる言葉なれば、忽ち一種の疑ひ心催し來り、

「では何か、彼奴が其昔し和女の身を」

と問はんとするを、韋倫は笑顔にて制し留め、

「ナニ爾では無いのですよ、唯だ私しの知て居る或人に、彼れは曾て害を加へ、其人が彼れを悪人として深く恨み、何うか罰して遣度いと云た事を、私しが知て居ますから、夫で斯申すのです」

と最輕く言消せども、公爵は益々眉を顰め、

「害とは何の樣な害を加へた、夫だけ聞せては呉まいか」

「他人の祕密を、私しの口で云ふ事は出來ぬでは有りませんか」

公爵は安からぬ眼にて、馬淵春介の顔を見詰るに、彼れ偶然にも此方を向き、恭々しく

公爵に默禮したれど、彼れは勿論幾年前に、我身が僞りて婚禮させたる其田舍娘が、此英國第一の貴婦人ならんとは思ひも寄らず、其婚禮の事すらも餘に忘れし程と見え、唯恭々しき樣のみにて、其外に何の色をも何の氣合をも現さねば、公爵は全く我妻に關したる害には非ずと呑込み、暫したりとも、妻に根問せし我心を恥る如く、

「イヤ、彼奴等が和女に恨れる直打は勿論無い、私は和女が不意に變な事を云たから、ッヒ氣を廻して濟なかつた、尤も慈悲深い和女が爾云ふからは、定めし彼れ根性の好く無い奴だらう、成るほど顏附も何だか惡人じみて居る、彼の樣な奴に租稅の事を扱はせるは第一私が氣に入らぬ、好し、誰が何と云はうとも早速其位置を取上る」

と云ひ切しが、其結果には是より數日の後、馬淵春介は單に、

「今日限り解雇」

と云ふ味も素氣も無き、言渡書を上役より受取りて、宛も我立てる足跡が急に千仞の谷と爲り、我身が之に陷入んとする如き心地して、是はと許り驚きしも早や後の祭なりしとぞ。

三八

する事爲す事、食違ひ、身の置所無き迄に失敗する例しは、世に間々ある事なれど、韋倫の一言にて公爵より免職せられし、馬淵春介の其後の失敗ほど甚だしきは類稀なり。彼れは其身が何の爲に免職せられしを知らず、直ちに公爵に嘆願狀を送り、元の役目に取立る事出來ずば、孰れへなり周旋せられ度しと申し出しも、公爵より斷然たる返書あり、

「爾後は汝の願ひ一切を拒絶す」

と最明白に斷り來れり、彼は固より、夙に我家產を蕩盡せし、紳士ゴロッキなど云へる者

の一種なれば、其職を失ひては身を支ふる由も無く、次の職業に有附く迄は、腕に覺えし博奕にて暮を立ん者と、倶樂部より倶樂部を經廻れども、何故にや一度び幸ひに勝を得る事あるも、次の日其所に至れば必ず我身を斥けて、此團樂に入れじと言張る人あり、何うやら誰か我身の後に廻り、我が事を惡樣に言觸して行くに似たり、孰れの倶樂部にも孰れの博奕場にても、總て一度限りにして二度と足踏を許されず、其他飲食店に行きても、一度びは他の客と同樣に扱はるれど、再び行けば必ず其給仕か帳場の者か、或は居合す客人のうち、我に何分の不快を與へ、繰返して行く事の出來ぬ樣に仕向る者あり、誰の行爲、何の爲とも知らざれど、我身の脊後に影の如く從ひ來りて、寸時も離れず我に仇する事をのみ仕組める人の有るに非ずば、物事斯く迄も都合惡く爲る筈無しと思はれ、相談の爲め友人の所に至るも、何故か我身に笑顔を示す人一人も無し、果は我が住へる家主よりも立

退を命ぜられ、如何ほど屋賃を高く拂はんと言出るも聞入れられず、明間を尋ねて借入の約條を結び、手金まで渡して歸り、是で漸く安心と荷物を携へ引移れば、急に差支へが出來たりとて、其手金を返されて斷らるゝ事幾軒と云ふを知らず、孰れに至るも同じ事にて止む無く宿屋に泊り込めば、一夜は機嫌能く客並に扱はるゝも、翌晩は必ず何かの故障あり、達てと云はば警察沙汰にもせられん程の勢ひにて、三月と經ぬうち住むに家なく、寢るに宿なく、交るに其人無く、働くに職業なく廣き天地の間に在りて、宛も狹き眼の中に介りし塵の如く、孰れに行くも忌嫌はれ、ゴロ〳〵と落着くに其場所無し、喪家の犬と雖も斯までには困じ果じと思はるゝに至りしこと、餘と云へば訝しき限りなり、何の爲め、誰の所爲ぞ、是れ他ならず、五田公爵夫人韋倫の復讐の一端なり、韋倫は公爵に說き、彼れを免職せしめたれど猶足れりとせず、斯る惡人を此の國に住はせては、他人に如何の害

はひを加ふるや知れずと思ひ、翌日直ちに英國探偵局に書を送り、最も事に長たる者二人を呼び寄せ、費用は如何ほどなりと厭はぬゆゑ、或る惡人をば夫と無く、此國に住ひ得ぬ樣に仕向得るやと問ひたるに、此國に住はして不都合なる惡人ならば、隨分外國へ追出す工夫は幾等も有と答へしより、夫人は他人の事に粧ひて、彼れが僞僧と爲り女の生涯を誤ちせたる罪を數へしに、探偵二人は爾る惡人ならばと云ひ、引受んと約せしゆゑ、夫人は彼れ馬淵春介の名を二人に告げ、直ちに數多の手當と給料を與へし爲め、二人は是より、影よりも猶離れず、最靜かに最微に、彼れ馬淵の身に災ひを初めたる譯なるが、彼れ夫とは悟り得ぬも、何樣我身に附纏ふ敵あるに相違なしと、固く思込むに至りしとぞ。

彼れ百計玆に盡き、象て饑饉の蓄へへの如く最後の用意に殘し有る、西富春人の許に到り、最早や此國に住兼て外國に落行んと思ふ故、昔しの仕事に面じ旅費だけも惠れよと乞ふに、

昔の仕事には既に其時に充分の謝金を與へ、其後も種々に周旋し遣したる事なれば、今更ら無心を受く可きに非ずと云ひ、愛想も無く跳附られ、春介は絶望して我身には必ず目に見えぬ仇ありて、到る所に我身を追來りて窘むるならんと云ひ、猶詰を繼で、

「本統に西富君、誰か窃に僕を恨み、執念く復讐を誓て居るに違ひ無い」

と打叫ぶに、復讐の語に春人はギクリト驚き、初て馬淵の言葉に氣を留る事と爲りし如く、今までの次第を問ふにぞ、馬淵は更に我が失敗を悉く繰返すに、春人は暫し考へ、

「したが君は、再び公爵へ嘆願書でも送て見れば好いのに」

「イヤ送たけれど今までに、例の無いほど冷淡な返事を得た」

「君は公爵夫人に逢た事は無いのかネー、夫人は大層慈悲深くて人を助けると云ふ事だが」

馬淵は頭を振り、

「駄目だよ、夫人の力で何うして僕の運が恢復する者か、夫人の顔は先達て芝居で一寸と見たけれど、其顔を見た時が僕の不運の初りだつた、其歸に巾着切に財布を取られ、翌々日免職せられた」

春人は此語を聞き、何うやら韋倫の復讐が徐ろ徐ろと行はれつゝ有る如き心地せられ、猶思へば昔韋倫が我前を立去るとき、特更に馬淵春介の名を聞きたる事も、自然と胸に浮び來るにぞ、我身も何やら薄氣味惡く、兎に角も我が舊惡の證人とも云ふ可き此男を、外國へ追遣るに如くは無しと思ひたれば、

「シテ、君は何所へ行く」

「米國サ、行たら最う再び此樣な邪慳な國へは足踏せぬ、彼の國の人と爲て、必ず一身代起して見せる」

再び歸らぬの一語に安心し、幾等の旅費が入用にやと問返すに、彼れ早くも西富春人の心中に意外に弱き所あるを看破し、莫大の金高を言出せしも、春人は金に代られぬ場合なれば、旅費だけを正金にて與へ、殘りは米國の銀行にて受取る可き爲替手形として與へたるに、馬淵は之を得て直ちに米國へ渡りしが、幾年を經ぬ中に同地の新聞に、大道に饑死して引取人なき者として廣告の出しを見たり、彼の不運は米國まで彼を追行きたる者と見ゆ。

三九

馬淵春介への復讐は先づ是だけにて充分なれど、畢竟馬淵は唯だ西富春人の手先に使はれたる丈にして、眞の恨みは春人に在り、馬淵を懲したりとて、春人に對する恨みは寸分

も輕くなる譯にあらねば、韋倫は何とかしてと相も變らず、其思案にのみ屈托するうち、此年も暮れ、翌年の春も過ぎ、倫敦季節と唱へらるゝ、好時節は盡果て、都には住難き夏の央とはなれり。

女皇陛下は例に由りて蘇格蘭に幸し、貴族は各々其別莊に引移り、別莊無き人は思ひ〳〵に避暑の地に旅行する程なれば、韋倫は所天公爵と共に、サクソン宮に退きしが、斯る中にも韋倫を英國第一の美人と崇めて、尋ね來る避暑の客は引も切らず、殊に皇族の中にも、暫し逗留させてよなど言込るゝ方も有れば、公爵は夫等の人々を集めて、我が領内に銃獵會を催さんと云ひ、九月の初に招待狀を發したるに、唯だ是蘭伯のみは、政治の用向を帶びて歐洲大陸を旅行中にて、此招きに應ぜざりしも、日頃遊獵の嗜みある貴紳達は、孰れも喜びて承諾し、彼の春人も其妻李羅子と共に、來り會する事となりたれば、韋倫の心に

隱るゝ復讐の焰は、人知れず其胸を焦すまでに燃熾れり。

殊に此招きに應じ、李羅子より韋倫に送りたる返事に、左の文句あり。

「所天春人は、暑さの餘り劇しき爲めにや、銃獵には得堪ずなど毎に無き弱き首を吐き、氣の進まぬ樣なりしも、唯だ妾の心にサクソン宮を忘れ得ぬほど戀しき事の有り候まゝ、達て說勸め、愈々同行する事と相定め候、斯申さば何とやら所天の冷淡なるを披露するやに相聞へ候へども、親しさの餘り、御身には有の儘を打明け申候、尤も所天の氣の勸まざりしは唯だ纔の間にて、夫も妻たる妾の熱心にて償ひ、明日出發する事に致し候間、御ゆるし被下度く、妾が何故にサクソン宮を斯く戀慕ふやと申さば、是は他人に話されぬ秘密なれども御身だけにはお聞せ申す可く候、實は妾初て春人と婚禮せし時より妾の心に眞に春人を愛すると云ふの情は無く、親の所在や其他の義理合にて夫婦と無り、其後は唯

た交際、彼れ是れの忙はしき爲め愛の生ずる暇も無かりしに、昨年サクソン宮に招かれて逗留するうち、初て眞に愛情と云ふもの心に湧き、春人が如何ほど妾を愛するや又妾が如何ほど春人を愛するやを知り、初て夫婦として一刻も離れ難きを覺え候、實にサクソン宮は妾に愛を敎へたる場所、春人の愛す可きを知しめたる家、妾に取りては何よりも懷かしく、其後は春人と妾の間益々親しく、親しきに附け愈々サクソン宮の事を思ひ出し候、猶又茲に内々御知らせ申度き喜びと云ふは、天の惠にて妾に春人の胤を宿し、來年の四月には可愛き一子を出産する筈に御座候、爾なる上は女の身として此上の幸ひは之無く御喜び下され度候」

云々。

韋倫は讀來り、色を變へ手を震はせて其書を置きたり、此後若し復讐の場合に臨み、我

心の鈍らんとする事も有ば、此書の事を思ひ出せよ、我が家とするサクソン宮にて、彼れ春人が初て其妻に愛せられ初しとは、罰當る可き彼れの身に、其罰を當らずして却て幸ひの來りし者なり、天彼れを罰せずば、吾身必ず天に代りて其罰を行はん、彼れが心に清き愛情の有得ぬ事は今更ら疑ふ迄も無し、彼れ實に愛無くして愛を粧ひ、其妻をまで欺けるに均しき者なりと、韋倫は殆ど我心を制し兼るほど、口惜く思ひしが翌日は愈々彼れ夫婦、他の客の群と共に來り着きたり、見れば手紙の意に違はず、眞に愛し合ふ夫婦の樣にて、離れ難なき風情なれば、韋倫は唯だ復讐の一刻も早からぬを、悶かしく思ふのみ。

韋倫が斯く思ふは、世に云ふ嫉妬の類に非ず、又春人に未練の殘れるが爲にも非ず、曾て春人の賤き心を見拔てより愛は全く消盡し、彼れを賤むの一念とは成りたるも、唯だ我が身の清きを思ふ丈け、益々彼れの汚はしさが容し難く、昔の愛の强かりしに引較べて、

今の憎みも亦強きのみ、遊獵會は十二日の定にして、夫まで一週間ほどの間春人にも李羅子にも、日々に顔を合さゞる事能はず、合せる度に夫婦の嬉けなる樣、目に障れど、李羅子の方は韋倫の心に斯る恨みの有とも知らず、唯だ何と無く打解けざるに氣を揉みて、或時親しく韋倫に打向ひ、

「私しは貴女を姉の樣に思ひ、常々所天にも是ほどの好い友達を得た事は無いと、申して居ますのに、貴女は何だが餘所々々しく見えますが、何か私しのする事にお氣に障つた事でも有ますか」

と問へり。韋倫は言葉短に、

「イヽエ、何にも」

と答ふるに。

「では所天春人の振舞に悪い所でも有ませうか、貴女は春人に向ては、又一入餘所々々しく見えますが」

韋倫は何と無く、

「ナニ人附の悪いのが、私しの持前でせう」

と答へ、我顔に現るゝ當惑の色を隠し得ず、纔に其場を立去りて、此上問はるゝ五月蠅きを逃れたるも、既に斯怪しまるゝ迄に至りては、愈々以て猶豫仕難し、何か工夫は工夫はと、空く心を絞るうち、忽ち浮ぶ一思案あり、爾なり、寧そ李羅子に打向ひ、充分の秘密を守る事を約束させ、其上にて春人の汚はしき振舞を有の儘に打明ん、斯くすれば彼れが李羅子の所天たる位置までも危くなり、從つて出世の道も塞り、彼れの身に一切の幸福無きに至らん、然り、彼れに取りて是はど辛き事は無らん、我身に取りて是に増す復讐の道

は無からんと、思ひ來りて韋倫は其美しき顏に、一種の最も物凄き笑を浮べぬ。

四〇

然り、春人の汚らはしき履歷を其妻李羅子に打明るの外は無しと、韋倫は全く思定め、既に斯よと見えたるも、是れ唯だ春人を傷るのみに有らで、我身の品格をまで傷るに同じからぬや、一身の仇は一身の力を以て果さんとは、兼てよりの誓ひなるに、今李羅子に訴ふるは卽ち其力を借んとするに同じからずや、斯く思へば是も亦行ひ難し、下樣にては劇藥を憎き男の顏に振掛け、其眼を燒潰すも有り、嫉刄を振ひて殺すも有りなど云へど、是も我身の行ふ可き事に非ずと、再び思案の淵に沈めり。

左右するうち愈々遊獵の當日と爲り、來客は朝未明に群を爲して出去りしが、獨り春人

のみは其妻李羅子が、昨夜より心地勝れずとの事なりし爲め、出行くを見合せて後に殘れり、固より病氣と云ふ程に有らねば、李羅子は我爲に所天の足を留しを悔ひ、春人に向ひて後より一同を追駈行きてよと勸むるに、春人は最優しけに、

「和女の靑い顏色が氣に掛て、何うして獵になど出て居られる者か、斯して和女の傍に居るのが、幾等安樂か知れ無いよ」

「だッて爾う心配して下さる程の病氣では有ません、最うスッかり氣分が直りました」

春人は如何にも其妻を愛する如く、昔し韋倫と共に居し頃より、口癖に唱ふ戀歌を謠ひながら、李羅子の手を取り晴やかなる窓の許まで連行くに、窓の外には二人の目にこそ見えざれど、二人の言葉の能く聞ゆる所に、先ほどより控へ居る一人あり、別人ならぬ公爵夫人韋倫なり。韋倫は固より二人の言葉を偸聞んとて玆に來りし者に非ず、客一同の出行

きて家内靜になりし爲め、久し振に打寛ぎ、日頃嗜めるバイロンの詩集を持ち、木の葉深く鎖せる緣側の涼しき蔭に身を置きて、讀ながら思へども、復讐の一念は斯る場合にも燃盛りて、文字の意も心に寫らず、斯る折しも忽ち耳に入るは、其後絶聞なく我が心を慰ひつゝ有る彼れ春人の歌なれば、其調子の最輕く、其聲の宛も何の心配も無き人の咽喉より出來る如くなるを聞きては、忽ち胸も張裂るばかりに悔しさの込上げて、一刻も茲に留る能はず、去ればとて今立上るは、何とやら二人の樣子を探る爲め隱れ居しやにも思はれ、立つにも立たれず、持ちし其書の碎くる許り握りゞむるに、又も聞ゆるは最嬉げなる李羅子の聲にて、

「ネエ貴方、彼所にソレ高い檜の木が有ませう、私しがアノ許に腰を卸し、爾して貴方が其の先の木の許に立て居る時でしたよ、初て私しの心に、眞實貴方を愛する情の出たのは、

私しは今でも—」

と云掛けて、其聲の異樣に停りしは何故ぞ、聞く韋倫は知過ぎるほど能く知れり、暫くにして、李羅子は初て聲の自由を得し如く、

「話掛けて居るのに、接吻など成ては了ませんよ、イヽエ本統です、貴方が向の木の許に立ち、今の樣な歌を謠て居る姿が、何の樣に見えましたらう、私しは心底から震附たいと思ひましたよ、此樣な男らしい男が、他人の所天にならず、我身の所天に成たのは何と云ふ仕合せな事だらうと、急に嬉しさが胸に滿ち、アヽ本統に是が夫婦の愛情だらうと、斯思ひました」

アヽ、是れ何等の睦さしき有樣ぞ、是れを聞く度、韋倫に非ずとも心を動かすこと無からんや、頓て春人も情に堪ざる聲音にて、

「ふゝヤ其様に褒られると、少し極りが悪いよ」
「ナニも極りの悪い事は有ません、是が本統ですもの」
「夫は爾だらうがネ、男の身の上は女の様に清く透明た者で無いからサ、お前に爾云はれると、何だか見苦しい猫頭梟が、清い鳩から褒られる様な心地がする」
「ダッて貴方は、何も今までに私しに聞せて極りの悪い様な事は有ますまい、私しより外の女を愛したとでも云ことが有ますか」
聞て玆まで來りては、韋倫は其所に根の生し如く一寸も動き得ず、ァ、彼れ春人、何と此問に返事するならん。
「爾サ、實は或少女を氣の逸ふほど愛したが、今思ふと實に濟ない事をした」
と若し、彼れにして斯る返事をしたらんには、韋倫の恨は幾分か弛みしならんに、悲しや

彼れは斯る正直なる言葉を口にする能はず、事も無けに言消さんとする、最輕き口調にて
「ナニお前の外に誰を愛する者か、若氣の至りで色々の事を思た事は有るけれど、夫れは何時かも話た通り、ホンの一時の氣の迷ひサ、爾サ話すにも足らぬ本統の氣紛れサ」
ァ、天も地も聞給へ、氣紛れ、氣紛れ、彼れは那れ程の深き契りを、ホンの一時の氣紛れとは、韋倫は聞くが否や、心熱湯の如くに湧返り、蒼き大空も火の燃る如くに見え、耳は早鐘の鳴る如くに響けり、氣紛れ、氣紛れ、彼れは唯だ氣紛れの爲め、清き少女に家を捨させ、親を捨させ、名も道も捨させて、提句に其心を殺し、浮む瀬も無き谷底に推落し、其生涯を過らせしが、斯る事總て唯だ氣まぐれなりしか、我身は唯だ彼れが氣まぐれの慰みに供へられしか、斯る無禮、斯る言葉が如何に其儘許さる可き、今までとても我心に、彼れに一點の用捨は無かりしも、其の無き用捨が又一入無くなれり、今までは無き用捨も

彼れの言葉一つにて、少しは茅む餘地ありしも、今は其餘地だに無し、何ぞ厭はん、何ぞ憐まん、

「好し、殺して仕舞ふ」

と最恐ろしき決心は、猶豫も無く韋倫の胸に湧出たり。

四一

彼が如き僞り者、實に殺すの外は無し、然り殺して仕舞はんとの決心は、一時に韋倫の胸に湧出たれど、人を殺すは此上なき大罪なり、幼き時より、

「汝殺す勿れ」

と云ふ、聖書の戒めを服膺して育ちたる韋倫の身に取りては、固より爲し得ざる所なるべ

し。

韋倫は心麻の如く搔亂れ、最早や一刻も此所に留まる能はず、殺すにも殺さぬにも、此上玆に在りて、彼の忌はしき言葉を聞きては、我身必ず絶息せん、殺す殺さぬ其思案は後の事にし、兎に角も此所より去らねばならずと、震へる足を踏ゞめて立上りしも、我室に歸らんには彼れ等二人は凭れ居る、其窓の前を通らねばならず、唯だ背後の方に退き、裏梯子より外に立出る一方なり。

此家の内に居るさへも、彼れの身より發する僞りの空氣に、我身咽死ぬるかと思はるゝ程なれば、寧そ晴やかなる外に立出で、我心の能く鎭り、我思案の定るまで、翠滴る樹の蔭に身を安めん、斯く思ひたれば、辛くも蹌跟く身を支へて逃るが如く此所より忍び去り、裏梯子より庭に出で、庭より背後の山に入り、茂る木の間を縫潛りて孰れへか迷ひ去りた

り。

春人夫婦は斯とも知らず、猶も其窓に凭りながら、

「本統に此樣な天氣ですから、貴方は今より一同の後を追ひ獵場へ行くが好いでせう、イエ私しのお願ひですから、私しの心を安めやうと思ふなら、何うか今から行て下さい」

と他事も無き妻の勸めに、

「爾サ、和女が爾まで云ふなら、其意に從つて行て見よう、鐵砲の掃除も出來て居るし、裝束さへ着替れば夫で好いのだ」

と云ひながら、時計を見て、

「今午前の十一時半だから、二時前には一同と一所になる」

李羅子は、宛も獨語の如く、

「ですが、男は獵などと云ふ事が何で其樣に面白いのでせう、罪も無く面白げに遊んで居る獸を射たり、景色を愛して心好く謠て居る鳥を出拔に殺したり、ネエ貴方本統でせうか、男の何よりの樂しみは、物を傷けたり窘しめたり、或は又殺したりするに在るのだと、昨夜も公爵夫人が言ましたが」

と何氣なく問ふ言葉も、今日に限りて春人の胸に、釘より痛く應へたり、ア、韋倫が斯る事を言たるか、我身に對して深き恨みの猶ほ消えず、何うやら感ずる所ありて、知らず識らず口に發せしに似たり、思へば成る程、男の心は物を痛めて樂むが如き場合多し、我身が韋倫への振舞も鳥獸など射ると同じく、斯る罪深き樂みの一には有らぬかと、俄に心の穩かならず覺ゆるも、犯せし罪の報いとや云はまし。

去れど夫も唯だ僅の間にて、頓て仕度をせん爲に次の室に退きたるが、凡そ人の情とし

て、如何なる惡事も一旦は必ず後悔する時の有る者なり、浮世の望み皆足りて、何不足なき身と爲らば、過にし事を顧みて、那の事は非道なり、寧ろ爲さずば好かりしに、此事は惡かりし、思ひ留りしならんには今と爲りて悔もすまじきになど、思出す者なりとか、今春人の如きも其類にて、一旦は燃盛る情火の爲め、罪と知りつゝ罪を犯して悔ざりしも、今は妻には愛せられ、世間よりは尊まはれ、富貴榮達の道も開けて何の不足も無き身の上と爲りたる爲め、先々に待つ望みは足り、過にし事を思出して、そろ〳〵後悔を初むるの時とはなりしならん。

夫は扨置き、彼れ早くも獵の裝束に身を固め獵銃を肩に掛け、再び李羅子の前に來り分れを告るに、李羅子も最と機嫌能く、

「其代り獵が濟ば直に歸つてお出なさいよ、外の方より後れると聽ませんよ」

「ナニ後れる者か、和女の健康が氣になるから、誰より先に歸て來る」

「夫から、アノ今私しが爾云た、彼の木の許を通て行くのでせう、玆が李羅子の初て愛情を起した所だと、斯思てお忘れ成さるな」

と云ひつゝ分れの接吻を移すに、何故か、李羅子は俄に我胸の穩かならず、騷立つを覺えたれど、是が世に云ふ「虫が知す」と云ふ者とも心附かず、唯だ昨夜來優れざる我が氣分の爲とのみ思ひ、其儘春人を出し遣りたるが、春人は玆を出で頓て彼の樹の許に至るに、今聞きし李羅子の言葉猶ほ耳の中に響きて、何と無く心嬉しく、獨り口許にニッと笑むに、晴れたる空も、鄙く日も、我身と共に笑むに似て、天地常よりも廣々とせし如く思はれ、樂しきこと限り無し、心の底なる惡心は總て隱れ、唯だ罪の無き善心のみ浮び來るは、斯る時なる可く、

「ア、我身ほど幸ひ多き人や有る」

と腹の中にて呟きしが、幸ひは常に禍ひの元とかや、一寸先に如何なる運命の我れを待てるやは、何人も知るに由なし、唯だ浮かゝと二三町又進むに、此時茂る木の彼方に誰やらん人の姿あり、枝葉の間より散々と春人の目に入るは、今朝しも公爵夫人韋倫が纏ひ居たる水色の絹服なり、人は必ず韋倫に相違なし。

四二

木の間に見ゆる人影は、全く韋倫に相違無し、春人の居る所より二三十間をも隔てたれど、春人は又疑はず、爾るにても韋倫は何が爲め斯る所に來り、唯獨り何を爲さんとするや、察するに彼れ公爵夫人として何不足なき身分なれど、心の裏に人の知らぬ悲みあり、

家に在りては落々と泣くにも泣れず、何人も見ぬ所にて、我身自ら我が愚痴を語り、獨り足るほど泣盡して其心を晴さんとの爲にもや、彼れ我れと住ひし頃も、心に染まぬ事あれば、獨り庭に出で木の間を徘徊ひて自ら其身を慰めたり、ア、公爵夫人と尊はるゝ身の上も、人に云はれぬ苦勞あるにやと、春人は初て最深き憫みの念を催し、是と云ふも畢竟は我身の不實に基きし事なるやも知れず、邊りに人無きは幸ひなり、彼れに近き充分に我が罪を詫びて、彼れの心を慰めん、我れとても何時まで彼れに恨るゝは本意に非ず、彼れの心打解て其口より汝の罪を赦すとの一言を聞かば、如何ほどか安心なる可きと、今までに發せし事なき殊勝の心を發せしは、全く其身が浮世の望み皆足りて、唯だ韋倫に恨るゝ事だけを、白玉の微瑕なりと思ふに至りしが爲なる可し。

斯く思ひ出すと共に、其身も同じく木間を潛り、韋倫の姿を追ひ行くに、彼れは此邊の

案内に能く慣れし者と見え、我身よりも早くして我身が道無き所を辿り、漸く彼れが玆に居しと思ふ所に至れば、彼れ早や幾十歩の先に在り、或時は其姿見え、或時は其姿隱れて殆ど追附くに由も無きかと思はるれど、彼れ何處までも歩み去る者には非じ、孰れにか必ず其身を停むるの時ある可しと、木の根を踏み、木の枝を押分けて進み行くに、其間にも幾度か我身に着たる獵銃の、蔓葛などに搦まり、或は枝葉などに支へられ、張く引けば自から發射するかと思はるゝ最危き場合あれど夫をも恐れず、其度に立留り靜に其搦む草木を脱し抔して、益々後るゝ而已なりしも、追ふ事凡そ一時間ほどにして、韋倫は其身の目指す所に着きしか、苔蒸したる平なる岩の上に腰を卸せし樣子なり。

見れば是れ、老樹欝蒼と立込めたる只中に、卓子を置きし如き小高き平地あり、樹遮ぎりて日も透さず、道も無ければ人の來る可き所に非ず、眞に獨り泣き、獨り物思ふに又と

無き靜なる場所なれば、扨は韋倫が兼てより此の所を見出して、其身の休息所に充置ける物なる可し、最早や我が聲も達するならんと思ひ、喘ぎながら、

「韋倫」

と打叫ぶに、聲は茂れる草木に沒せられて屆ぬにや、韋倫は唯だ靜かにして、眼を空中に浮ばせ何事をか思案するのみ、春人は彼れが深き愁ひに沈まぬうちと思へば、急ぎて其傍に近よりつ、再び聲を放ちて、

「公爵夫人」

と呼ぶに今度は明かに聞えしと見え、直に此方へ振向きたるが、唯一目春人の姿を見ると齊しく、韋倫は燃る怒りに其顏を白くしたれど一言の返事なし、春人は訴ふる調子にて、

「イヤ夫人、暫しの間お話が有まして、夫故わざ〳〵此所まで隨て來ました」

と云ひつゝ、其の小高き所に飛上るに、此時忽ち春人の脇下にて轟然一發、山も震ふかと思はるゝ恐しき響きあり、響と共に春人の脾腹に、堪得ざるほどの最鋭き痛みを覺え、立も得せず動きも得せず、春人は地盤の少し傾斜れたる所ろに、平たく轉がりて苦痛を叫けびぬ。

是れ何の爲め、何の苦痛、韋倫は口に嘆みの返事を含み、發せんとして未だ發せず、纔に立ちて春人を追退けんとする一轉瞬の間に此有樣を見、其儘其所に立すくみたれど、女の敏こき神經にて、怪むまでも無く、直ちに其の仔細を知れり。

是れ春人の脇下にて、彼れの獵銃の發したるなり、先程より幾度か草木に搦まり、發せんとする事ありて、唯だ春人の注意にて發せざりしも、夫人の居る所に飛上りたる其送端に、撥軌の强く落ち、春人の脾腹に射込たるなり、痛みに悶え苦むも無理ならず、身體中

の最も炙所、多く最も痛み强き所にして、而も暑き頃とて薄着の身と云ひ、之に幾百と數知れぬ豆粒の如き散彈を、直接に打込たる者なれば、此世に又と無き苦みを、彼れの腸に突入れたる者と云ふ可し、彼れ死したるか、死する能はず、去ればとて身を動かさん力も無く、唯だ骨搖き、肉躍るを見る、口には咽ぶ如き呻きを洩せど、息迫りて聲を爲ず、

「痛！　痛！」

と云ふ如く空しく唇を動かして、眼尖り、顏蹙む、其の煩悶の樣云はん方なし、漸くにして唯一語、

「タ、助け、助けて」

と洩せしも、之を聞く韋倫は石よりも冷たく、木よりも靜に、端然と其傍に立てる而已。

四三

韋倫が何の返事をも發せぬ中に、彼れ春人は其身の傷みに堪兼てか、

「痛、痛」

と呻き乍らに絶入りたり。

心配の激しき時は眠りても長くは眠る能はず、其の心配に魘はれて目を覺すと同じく、苦痛の過りに劇しき時は、絶入たりとて長くは絶入ること能はず、其の著痛に迫られて我に復る、春人は唯だ一二分間にして、再び元の正氣と爲り、元より猶甚だしき苦みを感じながら、目を開きて見れば、韋倫は猶ほ動きもせず、物をも云はずに其所に立ちてあり、

「助けて下さい、公爵夫人、コレ助けて」

と云ふうちにも前額には脂汗を流し、眉の間には張裂るばかりに太き筋を浮ぶれども、韋倫は更に何事も感ぜぬに似たり。

「コレ夫人、早く屋敷へ歸つて一同に私しの怪我を知らせ、釣臺を寄越して下さい」

と、云ふさへも其身の力を絞り出すほど辛けに見ゆれど、韋倫は唯だ物凄き光りを其眼に現して、最異樣に春人を見詰る而已、

「早く、早く、早く手當を仕て呉れねば、私しは死で仕舞ます、物云ふさへも痛みに響きて、エ、身體中が痛い、ウ、痛い、早く早く」

と其顏を蹙め盡せど、韋倫は猶是にも感ぜず、殆ど狂女の顏が時々に照輝く如く、其顏を輝かせ、春人の方に一歩寄りて、春人の頭の邊に俯向きたり。

固より韋倫は發狂せしに非ず、春人の耳近く口を寄せて、

「貴方は私しの云ふ事が聞取れますか」
と問ふ、春人は熱心に、
「聞取れます、早く、早く助けて」
韋倫は少しも騒がず、
「イエ、お聞成さい、貴方の樣な魂性の腐た方でも、幼い時に學校で聖書を讀だ事は有ませう、其聖書に、昔し異邦人が猶太人の手に落た時は、猶太人は神か我が敵を我手の内に引渡したのだと云ひました、貴方は夫を覺えて居ませう」
「ハイ覺えて居ますが、其樣な事は後にして早く！」
「サア其通り貴方も今、神から私しの手の内へ引渡されたのです、生ながら私しの手に落たのです」

「其樣な事より先づ、早く助ける人を呼で來て」
「イ、エ、決して助けては上ません、助ける人を連ては來ません」
と落着きて言放つ語々聞き、春人は苦痛の中にも、跳起んとする程に驚きて、又倒れ、
「エ、エ、是ほどの怪我人を助けぬとは、エ、貴女は氣でも違ひましたか、此儘に時を移せば私しは死ますが」
「爾です、お死成さい、貴方は死ねば成ません、ハイ私しの手で死るのが當然です」
と明かに言渡す其うちにも、日頃の恨は益々韋倫の心中に燃上ると見え、最早や落着てのみ云ふ能はず、悔しさに堪得ざる聲と爲り、
「身體の死る位の事は、靈魂の殺されるに比べては何の苦痛でも有ません、貴方は斯く云ふ韋倫の心を殺し、韋倫の靈魂をまで殺そうとした事を、豈もお忘れでは有ますまい、私

しの其後、今が今までも苦みは唯だ天が知る許りです、斯して私しの日の前に貴方が來て倒れたのも、唯だ天の配劑です、貴方は爾と思ひませんか」

實に是れ天の配劑と云ふ可き者なり、今まで求めに求めたる復讐を、今は手に血塗ずして果すを得る、之を天罰に非ずと云はば、餘りに妙に過るに非ずや、春人は此言渡しを聞き苦痛の外に、身の震ふほどの恐れを浮べ、

「イエ、其罪は私しが惡いから、私しも後悔して今日は貴女に充分お詫をする積りで、故故茲まで尾て來たのです、夫を未許さぬとは、貴女の心は恐し過ます」

「ハヽア詫る心が出たのですか、今に成て初て出るとは餘り遲過るとは思ひませんか、死刑の宣告を受た後では、罪人が何程悔ても最う許す道が有ますまい」

春人は起直らんと揉搔けども、少しも其身を動す能はず、

「イエ、其樣な事を言て居る場合では有ません、貴女が此儘捨て置けば、私しは死で仕舞ひます、此世に又と無い程の邪慳な辛い死を遂げますが」

「左樣、丁度貴方が私しの心を蹂殺にした樣に、又と無い程苦んで死のです、今までとても貴女へ仇を返す其工夫は、幾等も私しの胸に有りました、譬ば所天公爵へ貴方の名前だけ知せさへすれば、貴方は生て居られる人では有ません、或は又李羅子へ貴方の行ひを話しても」

「エ、エ」

「貴方は隨分苦い目に逢ふ所でした、併し其樣な苦みは貴方の身に輕過ますから、私しは我慢に我慢して今まで待て居ました所ろ、自分でも思附かぬ程の好き復讐を天から降して呉れました、此の蹂殺し同樣の復讐が最も私しの心に合ます」

「エ、夫人、夫は貴女の御笑談です、私しを嚇すのです、慈悲深い貴女の心に其樣な恐しい了見が有うとは、決して信じられません」

「イエ、本統です、私しは神にでも誓ひます」

「貴女は本統に氣が違ひましたか、人の斯まで苦むを見て助けぬのは、手を下して殺すのも同樣です、謀殺です、人殺です、貴女は人殺しの罪を犯しますか」

「人殺しとでも何とでも勝手に仰有い、私しは天の助けを得て、正しい復讐を仕遂るのです、心を苦められた其報ひに、貴方の肉體を窘めるのです」

最早如何の事を云ふも、到底夫人の心を動す可き道無しと見、春人は絶望して打叫び、

「エヽ斯も恐ろしい死樣が又と有うか、日頃健康な身體だけに、三日掛るか五日掛るか、其間此痛みを堪へ少しづつ死で行くのを、自分で知て居ねば成らぬとは、エ、夫人、コレ

お慈悲です、お情けです」

伏拜まぬ許りにすれど、韋倫の顏は秋毫も和がず、

「イエ、是だけでは未滿足しません、貴方が少しづつ死で仕舞ふに、此後三日掛らうが十日掛らうが、私しは毎日茲へ來て、其の少しづつ死ぬ樣を見屆けます、ハイ死切れるまで毎日來ます、貴方も私しの靈魂が少しづつ死るのを、毎日々々見て居たでは有りませんか」

ア、世に又是ほどの恐ろしき宣告やある。

四四

韋倫は發狂せしに非ずとは云へ、其强き復讐の一念は殆ど發狂も同樣なり、平生の愛深く、慈悲深き韋倫ならば、如何でか斯る無殘の振舞を忍び得んや、唯だ復讐の一念は其行

ひの無殘なれば無殘なるほど、益々心地好く思ふなり。

去れば韋倫は顔に一點の憐みをも浮べず、大理石に刻みたる美人より猶靜に猶冷かに、泰然として其所に立ち、春人の倒れし姿を見下し乍らも、心の内に彼れ春人の罪を數へ、

「ア、斯して置けば二日も三日も苦むだけ苦んで、其中に死で仕舞ふ、再び其顔で人を迷す事も出來ねば、其の汚はしき唇で人を欺く事も出來ぬ」

と呟くに、其うちに春人の傷口より流れ出る血は、滾々として四邊の芝草を染め、出る血と共に其力も出盡するに、今まで怒りに赤かりし春人の顔、次第々々に靑白くなり、物云ふ元氣も消たるかと疑はるゝ許りなれば、扨は我が思ひしほど彼れの苦みは長からず、二日三日と續かずして、今にも事切と爲る者にや、爾すれば天は我身より慈悲深く、我身が猶ほ彼れを苦ませんと思ふうちに、早くも彼れに「死」と云ふ救を下し、一切の苦痛を逃れ

しむるにやなどと怪むに、此時春人は死際の怪力を出せし者か、又も悔氣に目を見張り、

「夫では餘り酷いでは有ませんか、貴女は人殺しと云はれるのを厭ひませんか」

「前々からの約束ゆゑ、何うも致方が有ません、昔し私しが貴方の前に泣伏て、何うか助けて下さいと云た時、貴方は何と云ひました、私しの顔を見て嘲笑つたでは有ませんか、今は貴方が私しの前に泣伏すから、私しが嘲笑ふ順番でせう」

春人は返事も無く、唯だ呻きて其口を動かせど、韋倫は知らぬ顔にて言葉を嗣ぎ、

「其時貴方は私しを、名も無く出世の道も無い日蔭に埋る女と思ひ、復讐などとは片腹痛いと思たでせう、併し私しは天の力を信じ、天は正しき人を助けると信じますから、必ず復讐の時が來る者と思ひ、貴方の目の前で誓ました、ハイ他日貴方が私しの前に泣伏し、幾等助けて呉れと叫んでも、私しは助けませんから其時に思ひお知なさいと、言渡して置

ました、韋倫の此言葉をお忘れ成さるなト、那れ程念を推したのに貴方は最忘れましたか」

恨の限りを繰返すに、春人は返す可き言葉無けれど、此場合に臨みては唯だ韋倫の心を動すの外、我身の助る可き一法無ければ、死物狂ひの有様にて、

「ダッテ、此儘私しを見殺しにすれば、貴女にも必ず天罰が參ります」

「ハイ天罰が參ても夫は私しの事ですから、貴方が心配なさるには及びません、私しは甘じて其天罰を受ますよ、如何ほどの苦みでも堪へますよ、決して再び貴方に向ひ、助けて呉れとは言ませんから、貴方は無言て自分だけの天罰にお服しなさい」

「でも夫人、貴女は天罰よりも世間の罰の恐しい事を知ませんか、私しが若し助かれば、決して無言ては居ませんよ、貴女を人殺の罪人として法廷にも訴へ、且つ其罪を世間にも鳴します」

「夫も御勝手です、其時には私しは私しだけに自分の身を辯護します、夫よりも猶ほ返道は、此儘貴方を捨て置けば好いのです、其中に自然と死で仕舞ひ、法廷に訴へる事も、罪を鳴す事も出來なく成ります」

春人は又も痛みに其身を悶へつゝ、

「其樣な事を仰有らずと、能考へて下さいな、今私しを助けて呉れゝば貴女を命の親と崇め、牛涯貴女の奴隷です」

「夫には及びません」

「此儘捨置けば自然と死ぬるだらうとお思ひですか、何で此儘死ませう、聲の有る限り、力の續く限り、助けて呉〳〵と叫びますから、誰か必ず聞附けます」

「試しに叫んで御覽なさい、誰が聞付ますか、茲は最う數ケ月の間私しの隱れ場で、私し

は毎日の樣に玆へ來て、貴方に對する復讐の工夫ばかり考へて居ましたが、一度も人に逢た事は有ません、人の通る道筋とは全く方角が違つて居ます、一年玆で泣聲を放ても、誰も聞附る事は有ません」

「でも、山番は通ります、爾すれば貴女の心の鬼々しさは、直に世界中の人が知ります」

「玆は山番も來ぬ所です、夫だから私しが自分の隱場に選んだのです」

「山番は來ぬにしても、私しの友人が尋ね出します、第一に私しの妻李雛子が、左樣サ私しが日の暮まで歸らねば、直に心配を初め、夫こそ草木を分てゞも、見出すまでは探さずには置きません」

と言來りしも、韋倫の少しも騷がぬ色を見ては、是さへ望み無しと思ひしか、流石の惡人も唯だ死樣が悲しくなり、聲を放て泣出し、

「エヽ、妻も有り、子まで近日出來やうとするのに、妻の介抱さへ受けずして此死樣は何事ぞ、天に憐みは無いものか」

と叫ぶうちにも、涙は其頰を傳い降れど、手を曲けて之を拭はん力も無し、人間情嘆の極度とは、斯る場合を云ふにや有らん。韋倫は最と靜に、

「サア、西富子爵、貴方の頰に下る其の涙が、縱し血の涙で、有るにしても、貴方の今の苦みは私しの今までの苦みに比べては、物の數にも足りません、私しは幾年月、死るより猶辛い苦みを堪へて居ました」

「でも有ませうが、私しも最う充分後悔したから、許して呉れても好いでは有ませんか、コレ夫人、コレ韋倫、貴女は昔し、私しと愛し愛された事を忘れましたか、一度は命までも捨合ふほどの仲で有たでは有ませんか、其時の事を思へば——」

言葉の猶ほ終らぬうち、韋倫は苦々しきほど冷淡に、

「其時の事は、皆貴方の氣紛でした」

と言返せり。

四五

氣紛れの一言を言返せしは、韋倫の身に取りて重き負債を拂ひ得たる程の心地なれど、春人は其言葉の如何ほど我身に苦きやを、味はふの遑あらず、唯だ命だけ助かり度き一心なれば、

「コレ夫人、貴女は決して夫ほどの心無しでは有ません、夫ほど邪慳では有ません、年も若く器量も好し、世間からは尊はれ、何一つ不足と云ふ事の無い身分です、此上慈悲深くさへして居れば、貴女は此世の女神です、交際場裡の女王です、是ほど仕合せな身分を以て、何で恐しい人殺の罪を犯します、何で私しを殺します、一時の恨は恨でも取返しの附かぬ罪を犯し、必ず後悔成されます」

「イエ少しも後悔しません、幾年以來充分考へた復讐ですから」

「でも私しを殺し、其死骸を此樣な所に晒して置て、貴女は安樂に眠られますか」

「ハイ眠られます、今夜こそ初て何の夢も見ず安々と眠ります、復讐を仕果せて氣に掛る事が有ませんから」

「夫は嘘です、此後人が春人と云ふ名を話す度に、貴女は必ず氣が咎め、自分の罪に責られて落着て居る事は出來ません、私しを殺したと云ふ事を、自分の素振に現して人に見拔れます、夢にも私しの死樣に魘はれて、必ず所天公爵に悟られます、昔から寢語で罪の露

見した罪人が、幾人も有る事を貴女は未知りませんか」
「イヽエ、私しの胸には常に貴方の悪事が覺えて居て、天の許した復讐を遂たのだと自分で思詰ますから、少しも魔はるゝ事も無く寢語も云はず、素振にも現しません、若し現れ相な時には、貴方の悪事を思ひ出せば夫で心が鎭ります」
と一々平氣にて言開くは、復讐の一念の何よりも強かりしが爲なる可し。
春人は餘りの事に、傷の苦痛さへ忘れしか、今は罵る調子にて、
「貴女は女では有ません、鬼女です、鬼女よりも猶恐しい心です」
「左樣です、私しが若し鬼女ならば、貴方が鬼女に仕たのです、私しの身體から女らしい優しき心を貴方が奪て仕舞たのです、奪て仕舞て其後で、猶だ女の心が殘つて居ると思ひ、助けて呉れなどと仰有るのは、自分の仕ぐさを忘れましたか」

何と云ひても助け呉る見込も無ければ、春人今は悔しさに堪ざる如く身を揉搔て、
「エヽ、貴女は、私しが此儘阿容々々死で仕舞ふと思ひますか、身動きの出來ぬ程の大怪我でも、何で此儘死ませう、貴方が立去れば其後で、一寸でも一分でも、少し宛少し宛、此山から這出します、何時間掛るか幾日掛るか、終には人の居る所まで達して、貴女の罪を訴へます」
「夫は御勝手です」
春人は唯だ必死の力にて、這寄らんと身を起したれど、先程よりの出血にて、其力既に盡き、且は力を出すに連れ再び非常の痛みを催し、其儘又も打倒れて、
「エ、何うすれば助るだらう、夫人、お慈悲です、お慈悲です」
「何うも斯も有ません、唯だ神に今までの罪の亡る樣に、祈ながら斷念めてお死なさい、

貴方が活て人間世界へ出る道は、一切塞つて仕舞ました」

春人は眞に死物狂ひ、暫しは我手の屆く芝草を掻むしるのみなりしが、忽ち

「己れ惡女め！」

と叫びつゝ、韋倫の衣の裳を捕へんとす。

韋倫は彼れが猶ほ捕へ得ぬ間に、早くも其裳を引き、

「ドレお分れに致しませう、併し明日又貴方の死樣を見に來ます、昔し貴方が私しを辱しめた時、婚禮の指環だと云ひ、私しの指へ挿して下さつたアノ汚らはしい指環が、今も猶ほ父に預て有ますから、明日はアノ指環を持て來て貴方の指へ環て上ます、父へは復讐の終つた時に受取ると言て有ますから、アノ指環を貴方に返して仕舞ひさへすれば、夫で私しと貴方の間には最う何の關係も無なります」

斯云ながら立去んとするに、春人は如何にも我身が活て人間に復る可き、其道の絶果るを見て、

「貴女は之を復讐と云ますけれど、人間世界に例の無い實に邪慳な復讐です、復讐で無く犯罪です、他日必ず露見して貴女は公爵夫人の地位を失ひ、牢屋の中の人と爲つて世界中から賤まれます」

「其樣な事は少しも構ません」

「窮鳥懷に入ればと、昔から云て有では有ませんか、何れ程の野蠻人でも、怪我人を助けぬと云ふ程の慘刻な振舞は致ません」

「所が私しは野蠻人より猶酷い鬼女ですから、野蠻人のせぬ事もするのです、明朝は指環を復しに來、其後も貴方の死切れる迄は、毎日見屆に來ますから」

春人は絶望の叫び聲にて、

「其中に露見します、人を殺して露見せぬと云ふ事は昔から有ません」

「イエ人殺しより猶酷い、貴方の私しへ對する罪が、今まで露見せずに居ますから私しの復讐も露見しません、誰も私しが貴方を恨むとは知ませんから、エ爾でせう、私しと貴方の戰かひは、誰れも知らぬ祕密の中で、勝負が付て仕舞ふのです」

「では最う何と云ても、何うしても、助けては呉ませんか」

「ハイ、助けては上ません」

斷然たる言葉を殘し、其儘韋倫は立去るに、春人は猶ほ韋倫を引留めんと、聲を限りに叫び立れど、韋倫の姿既に空し、ア、韋倫は玆に他年の復讐を得しとは云へ、死際の絶望に叫ぶ聲、早鐘の如く猶ほ耳に響けり、果して其心の安を得べきや、況んや春人猶ほ死切

りたるに非ず、彼れを此所に殘し置くの危さも韋倫は知らざるべし。

四六

助て呉れと泣叫ぶ春人の聲を後に聞きつゝ、公爵夫人韋倫ば木の間を潛り、枝葉を押分け靜に其所を立去りたり、立去りたれども、彼春人の叫び聲は容易に消えず、遠ざかるに從ひて微には成り行けど、其微なるに從ひて我耳の中に響く神經の聲は益々高し、一歩一歩、漸くに道の有る林の、稍や開けたる所に來り、初て日の光に照さるゝ韋倫の顏を如何にと見れば、細き口は緩合ふかと思はるゝ程に堅く締め、其唇に紅の色なく、頰は土よりも青くして、眼は虛呂々々と落着かず、嗚呼是が英國第一の美人と云はるゝ韋倫か、是が肉あり血あり命ある、活たる公爵夫人なるか、唯だ鐵を以て刻みたる冷たき人形に似た

るのみ、先刻此林に入行きたる其人と、今出で來る此人とは、晝と夜ほどの相違あり、同じ人とは思はれず。

韋倫が斯く變るも無理ならず、怪我せる人を助けもせず、其自ら死るに任せ助を呼ぶ聲を聞流して立去るは、罪の中にも最懼ろしき罪なればなり、韋倫は之を天の下せし復讐なりと云へり、復讐は復讐なれど罪たるに相違無し、唯だ手を下して殺さぬと云ふ迄なり。

頓て我家とするサクソン宮の裏庭の入口に着きたれど、容易には歩み入る能はず、今は是れ午後の五時、先ほど山に入たる時より凡そ小半日も費したり、獵に出し客、大方は歸り盡せし頃なれば、我が青き顏を何人に怪まれんも知れず、何とかして血色を整ふる術は無きやと、良久し其所に佇立つ、我身は何の罪をも犯せしに非ず、唯だ助く可からざる惡人の死を、助けざりし迄の事なり、否天罰の行はるゝを妨げざりし迄の事なり、何の恐るゝ

事や有ると、強て我心に思込めども鐵よりも堅くなりたる我唇に、一點の笑を浮ぶるに由無し、居間に入りて暫し息まば、其うちには神經も弛ならんかと、我家ながら、他人の家に忍び入如く窃に入り、庭を傳ひて漸く廊下に上る折しも、忽ち、

「ヤ、韋倫」

と聲を掛るは、我所天公爵なり。

避るにも避け難く、其儘公爵に向ひて立留まるに、公爵は怪みて、

「オヤ先ア、和女の着物には……」

血が附て居ると云はるゝかと、韋倫はビクリとするに、

「大層塵が着て居るが」

韋倫は頓に返事も出でず、我が着物を見廻すに紛らせて、暫らく其顏を俯向け、暫く出

來るだけ色を正し、
「ハイ痛頭が仕まして、森の中を散歩して居ましたから」
と答ふる聲は、地獄の底より聞ゆるに似、我口より出るとは思はれず
「何だ頭痛、成るほど色が悪い、今に會食の時刻だから夫まで居間に行き息むが好い」
「ハイ、爲致しませう」
と答るがヤツトなれども、猶ほ氣に掛る所あれば、
「皆樣は最う、獵場から歸りましたか」
「皆歸て來たけれど、一人西富春人だけ歸らぬから、李羅子が大層心配して居る樣子だが」
韋倫は血色の無き我顏の、更に火よりも熱きを覺え、我手の震ふを留め得ず、公爵は斯
とも知らず、言葉を繼ぎ、

「何でも春人は一同より幾時間も後に茲を立ち、獵場に行たと云ふ事だけれど、獵場で誰
も春人を見た者が無い」
韋倫は辛くも調子を合せ、
「オヤ失は先ァー」
「唯だ山番の一人が、山の中で彼れの姿を見たとは云ふけれど」
韋倫は又驚き、
「ヘエ、山の何の邊で」
「ナニ獵場から遠くも有らぬ、ロワウードと云ふ谷間で」
韋倫は其山番の言葉の、全く誤りなるを知れり、春人の通りし道、春人の横はれる所ろ、
其のロワウードとは全く方角違ひなれば、番人は誰か春人に似し人の姿を見、春人なりと

思ひたる丈なる可し。

「併し爾心配する事は無い、彼却々拔目の無い男だから、吾々の銃音のせぬ方角へ分入て、獨りで充分の獲物を仕て居るのだらう、此樣な事には構はず、和女はサア息むが好い、益益顏の色が惡く見える」

韋倫は唯だ人の見ぬ一室に隱るゝを幸ひと思ひ、所天に分れて直ちに我が居間へと退きしも、唯一人は人の前より猶辛し、血に塗れたる春人が、恨しげに叫ぶ樣、目の前に浮び來り、窓の外に吹く風の音さへ、彼れの苦轉つ音かと思はれ、耳の中には彼れの叫び聲益益高し、眠るとも夢に魘はれ必ず寢語に露見せんと、彼れが云ひたるも玆の事にやト、思へば思ふだけ愈々恐ろしく、必死の想ひに我心を勵まして、彼れは我身を辱めし大罪人なるぞ、彼れの死するは我が身の仕業に有らで天罰なるぞ、と空しく口の中に繰返せど何の

甲斐なし、最早や一刻も唯獨りでは留り難きに至りたれば、寧そ身裝を繕ひて客の居る所に行かんものと、先づ着物を更めて客座敷へと出行くに、一同が我顏を眺むる樣、日頃とは變るに似たれば、猶ほ我が樣子に落附かぬ所あるにやと、穩かならず怪む所へ、第一に進み來るは春人の妻李羅子なり。李羅子は心配に堪難き面持にて、

「ネエ夫人、春人が未歸りませんが何したものでせう、私しは夫が氣になり、切ては貴女の優しい言葉で慰めて戴き度いと思ひ、貴女を尋ねて居たのですよ、何とか云て私しの氣の休まる樣に仕て下さい」

と云ふも泣出さん許りの聲なれど、如何にして李羅子の心を慰め得んや、我が知れるは、春人が死掛りて森の中に倒れ居る最と邪慳なる事實なるに、丈を推隱して優しき言葉を出さんこと、迚も我が力の及ぶ所に非ず、ア、我身は我室にも、客間にも、唯一人も人の前

にも、身を措くの所無きかと、韋倫は自ら怪みたり。

四七

李羅子の氣遣ふは無理も無し、韋倫は笑顔を示して慰めんと思へども、如何で笑顔の示さる可き、我手に掛けて殺すより猶ほ酷き目に春人を逢せし後、一時間も經ぬ中に其妻李羅子に我顔を見らるゝさへ、氣の咎むる業なるにト、心に一方ならぬ苦さを覺ゆれど、何とか返事せずには濟難き場合なれば、ヤッとの想ひに我聲を柔げて、

「オヤ、貴女は戀病にでもお成なすつたのですか、一時間や二時間、所天の歸りが遲いとて、其樣に心配する者が何所に有ます」

言ひは言たれど我が言葉、毎もの如く自然ならず、宛も他人の口より發するかと思ふ程

なり、李羅子も夫と怪みてか、

「オヤ夫人、貴女のお聲は何だか變に聞えますが、氣分でもお惡くは有ませんか」

惡きも、惡きも殆ど居堪らぬほどに惡けれど、大事の場合と韋倫は氣を引立て、

「イヽエ、少しも其樣な事は有ません、貴女が氣の所爲で其樣にお思ひ成さるのでせう」

「ホンに氣の所爲かも知れませんよ、先刻春人が出て行く時なども、何と無く胸に感じ、彼れの目の前に不運が浮んで居る樣な氣が仕ました、若しや世に云ふ蟲が知せると云ふ者では無からうかと、此樣に思ひましたが、自分でヤッと打消しました」

「貴女こそ氣分が勝れぬから、其樣な事をお思ひ成さるのです、誰でも加減の惡い時は詰らぬ事が氣に掛ります」

調子の合ふや合はざるやは、韋倫自ら知らざれど、兎に角是だけの言葉にて幾分か心配

の薄らぎしと見え、李羅子は其愛らしき眼を擧け、滿面に韋倫の顏を眺めて、
「では、今に春人が何の怪我も無く歸つて來ませうか」
此憐れむ可き問ひに合ひ、韋倫は何と答へ得ん、怪我も怪我、助かる可き道の無きまで大怪我せし人が、怪我無しに歸り來る筈あらんや、开を知ながら空々しき返事するは、今まで嘘一つ言ひし事なき韋倫の身に取りては、堪へ得ざる所なれば、取つ措つ思案せんにも其暇無く、
「夫が何うして、私しに分りませう」
「夫でも貴女は、何方だと思ひます、怪我も何もせず無事に歸ると思ひますか、貴女の御樣子が何と無く變ですから、若や私しの耳に入れて成らぬ樣な事柄を、御存じでは無いかと私しは此樣に思ひますが」

流石に女の神經は、韋倫の胸の祕密を看破るまでに至らんとするか、韋倫はハッと思へど、戸惑ふだけ猶ほ益々疑はるゝ場合、去ればとて言紛らす僞りは、我口に出ざれば、
「私しが若し貴女なら、少しも其樣な心配は致しませんよ、男と云ふ者は得て歸りが遲く成勝ですもの」
「でも春人は、決して時を違へた事は有ません」
と云ひ李羅子は力無く頭を垂れしが、漸くにして自ら思直せし如く、
「成るほど貴女の仰有る通り、今にも無事に歸つて來て、私しが是ほど心配したのを笑ふかも知れません、ですがネ、私しはお腹の兒が出來てから、一刻も春人の傍を離れる事が出來ません」
と云ふ折しも、食堂の方に當り會食の時刻を報ずる最初の鐘の鳴たれば、李羅子は又も氣

遣はしけに、

「ソレ最う食事の時ですのに、夫でも未だ歸りません、本統に貴女は春人が無事に歸ると思ひますか」

韋倫は詮方なく、

「爾う思ふより外に、思樣が無いでは有ませんか」

と口には曖昧に答ふれども、我目の前には、春人が森の中にて血塗れと爲り、其苦痛に苦轉ちながら我身の邪慳を罵る樣、歴々と浮み來り、最早や李羅子の前を逃去るの外無しと思ふのみ。

去れど李羅子は韋倫を放す可き樣子なく、宛も小兒が母の手に縋る如く、韋倫の手に縋りて、

「貴女は何うぞ私しの傍に居て下さい、貴女の外には話相手も有りませんから、今貴女に行て仕舞はれては私しは倒れて仕舞ひます」

此時又も第二の鐘の音聞えたれば、韋倫は初ふて氣の附きし如く、

「オヤ最う此樣な刻限でせうか、是ほど遲いとは思ひませんでした」

「未だ春人は歸りますまいか、夫とも食堂へ來て居ませうか」

「兎も角も食堂へ行きませう」

とて韋倫は李羅子の機嫌取る、辛き役目を我肩より一同の客に移す可き時來りしを喜び、其儘手を引き食堂に入行くに、固より春人の並び居る筈は無し、一同の客人は李羅子の心配氣なるを憐みてか、多く春人の事を話せど、誰一人春人に怪我などの有しならんと氣遣ふ者無く、唯ご獲物の多きに時を忘れ、今も猶ほ林の中を經廻り居るならんと云ふのみ、

其中に食事も終り、夜も早や十時に及びたれど春人の便り有らず、茲に至りて一同は始めて眞實に怪む可き事の如く思ひ出し、此儘には捨置き難しと云ふ人さへ有るに至れり。

四八

最中や十時に至りたれど、春人は未だ歸らず、固より歸る可き筈は無し、去れど一同の客人は、眞に彼れ春人の身に怪我などの有りし事とは、思ひも寄らず、人里より遠くも離れぬ此界隈にて、爾る間違ひの有う樣なしとは何人も信ずる所なれば、唯だ春人の妻李羅子の氣遣はしげなる顏色、益々深く成行くを見ては、夫に面じて樣々の說をなせり。

十時に至りて獵場より歸らぬは、隨分例しの有る事なりと、異口同音に唱ふれど、既に十時を過ぎ、十一時を過ぐるに及びて、イヤ道に迷ひて近村の誰かの家に一泊を求めたるならん、ナニ圖らず舊友にでも出會ひ、話に實が入りツイ刻限を誤りて、其人の家に在るならん、否其積りにて使ひを此家へ向け出したれど、其使ひの橫着にて來らずに濟せしならんなど、思ひ〳〵に言出せど李羅子の不安心は少しも薄らがず、

韋倫の所天五田公爵は、主人の事とて客の心配を捨も置かれず、厚く李羅子を痛はりて、心利たる數人の山番を手分して、夜通し獵場の近邊を探さしめんと云たれば、李羅子は是に少しく心を安じ、泣かぬばかりに其恩を謝して我室へと退きたり。

韋倫も傍に在りて此言葉を聞たれど、春人の倒れ居るは全く獵場とは方角違ひなれば、如何ほど獵場の近邊を尋ぬるとても、分る筈無しと思ひ、敢へて心を動かさゞりき。

斯る有樣なれば、一同何と無く引立たず、毎もならば音樂臺に登るも有り、聲を自慢に謠ふも有りて、二時頃までは打興ずる所なれど、今宵は謠一つ唱ふ人も無く、十二時少し

過る頃には、皆銘々の室へと退き盡したれば、韋倫も我が寢間に引籠りしが、今までは客の言葉などに紛れ、爾までとて思はざりしに、寢間の最靜なるに連れ、我が振舞の恐しさ活々と我が心に浮び來り、寢るにも寢られず、起るに起られず、ア、惡事は總て己れの振舞より露見すと、春人が我れを罵りしも玆の事か、

我身が彼れを見殺しにするは、素より惡事と云ふに非ず、天の與へし復讐に止まれども、我身の寢も得せぬ有樣を所天公爵初め、其他の人に見られては、尋常ならじと怪まるゝは必定なり。

何人も見ぬ所にて獨り苦み度き丈け、思ふ存分苦むの外は有らずと、入口の戸に內より固く錠を卸し、是ならばと寢臺に復るに、又氣に掛るは室の窓なり。

思へば丁度此窓は、彼れ春人が血に塗れて苦み居る其方角に向へるなり。

雲間洩る月影の差覗く如く思はるゝも、彼れの恨みにあらざるか、彼れは此儘には死せじと叫び、一時に一寸づつたりとも躙り寄り、幾時間掛らうが助くる人の有る所まで至りて、我身の罪を鳴さんと云ひたり。

今頃は彼れ何所まで躙り寄りしか、今にも此窓の外まで來りはせぬか、今にも彼れが助けて呉れと打叫ぶ聲の聞えはせぬかと、唯だ恐しさの益々加はるのみなれど、窓を開きて外の樣子を見る事だにも得せず、空しく二時三時と鳴る鐘を聞盡し、四時に至るも猶眠らず、五時に至るも猶動かず、竦縮みて寢臺に蹲れしまゝ悶え明す一夜の長さは、年よりも長きかと疑がはれ、此の間の韋倫が苦みは傷に倒れて山の中に煩悶する、春人の苦みにも劣らぬならん。

漸くにして永き夜は明たれど、窓の外に春人の這寄りし跡も無し、扨は彼れ流れ出る血

と共に其身の力盡果てゝ、全く死切れたる者ならん、今にも人目の際あらば、昨日彼れに約せし通り、父より僞婚禮の指環を受取り、彼れの死樣を見屆に行かんなど、此後の思案に移る折しも、外より輕く戸を叩く音と共に、我名を呼ぶは悄れ果たる李羅子の聲なり。

此聲を聞き韋倫は忽ち最深き憐みの念を催し、我身は春人の罪を憎むが爲め、罪無き李羅子にまで罰するに至りしかと思初めしも、今は心を弱くする場合に非ず、兎も角我身が夜一夜、苦み明せし事を悟られては成らずと思ひ、形を正して戸を開き、

「イヤ貴女の室へ伺はうと思うて居ました」

と云ふに、李羅子は泣腫せし目を上げて、

「本統に何うしたら好でせう、未春人は歸て來ません」

韋倫は何と返事の仕樣も知らず。

「昨夜公爵が山番に手を分けさせ……」

「ハイ捜させて下さつたけれど、少しも行方が分りませぬ、何所か人目の着かぬ所で怪我でも仕て、倒れて居るのでは有ますまいか」

宛も韋倫の心中を見拔し如く言來るは、所天を思ふ一念の、自から玆に至りし者なるべし。

韋倫は唯纔に、

「倒れて居れば、山番が目附る筈ですが」

「若し晩方までも歸らねば私しは泣死ます、ハイ私しが是ほど心配するのを知り乍ら、歸て來ぬ樣な春人では有ません、歸る事が出來ぬ程の怪我をしたに違ひ有ません、夫人、何うしたら好でせう」

と云ひつゝ縋りて、韋倫の胸に泣伏したり。

アヽ可愛しき此姿は、再び所天の身に縋り附く時も無く、其身早や既に寡婦の身と爲んとするに、幵を知らずして所天々々と叫ぶにやと思へば、韋倫は我が仕業の益々恐ろしく、一層の事何も彼も打明けんかと、殆ど口まで込上げたり。

今我口より一言の誠を吐かば、屋敷中の人、彼の所に馳せ行きて彼れ春人を擔ぎ來り、醫者を呼び藥を與へ、此の眞實なる李羅子の手にて、介抱と云ふ介抱を仕盡し、再び元よりも猶親しき夫婦と爲らん、是に增す功德あらんや、是に增す善行あらんやと、胸は矢竹に騷けども其代り彼れ助からば、我身は如何なる境涯に陷入らん。

折角の復讐は唯一歩の眞際にて覆り、彼れに我が罪を鳴され、我身の運命再び彼れの手の内に落んのみ、其時こそは、我が彼れに辛かりしに輪を掛けて、彼れ我れに百倍も辛か

らん。

否、否、幾等李羅子が痛はしとも、決して露ほども此の恐しき眞實を打明く可からず、我心を鬼にして、唯彼れを死るが儘に死なしめざる可からずと、漸くに思極めし韋倫の胸の中は、又察するに餘りあり。

四九

韋倫は李羅子の痛はしさと、我が振舞の恐ろしさに、殆ど顏色を支ふる能はず、着物を替ると言做して、暫し李羅子を待せ置き、逃るが如く次の間に走入りたり。

入て暫く考ふるに、我身は最早や李羅子を慰むる言葉なし、所天公爵の許に連行き、公爵の手に任すより良きは莫しと、直ちに衣服を着替て、先づ鏡に向ふに、夜一夜を恐れ明

せし我顔は、日頃の艶々しきに似ず色も全く青冷めて、我ながら恐しと思はるゝ程なるにぞ、少しばかりの化粧を施し、是ならば人にも怪まれじと見て、再び李羅子の許に來り、斯る時には男の智慧を假る外なしと、其手を引きて公爵の許に至るに、兼て憐み深き公爵は、韋倫の言葉を待つ迄も無く、

「イヤ李羅子さん、定めし心配では有ませうが、ナニ晝までには屹度春人が歸て來ます——か、夫とも必ず便りが有ます」

李羅子は涙に曇る聲にて、

「若し無ければ」

「イヤ若し無ければ、其時こそ人を厭ず草木を分て、此近邊十里の間を、殘る隈なく探させます。昨夜は獵場の邊ばかり探させましたが、今度は方角を限りません、ハイ私しが自

分で人足の差圖をして、林の中に落た木の葉を一枚々々取退けて探させます」

と眞實面に現れて說きたれば、李羅子は纔かに其眉を開きしも、之に引替へ韋倫は我運も玆に盡るかと怪みたり、一旦斯と決せし事は其通りに行ふ事、公爵の日頃の氣質なれば、午後には充分の詮索を行ふに相違なし。

春人既に死切たる者ならば其死骸が現るゝとも、死人に口なく恐るゝ所ろ少しも無けれど、若し息の猶ほ通ふ儘見出さるれば、我身は忽ち破滅なり、如何にせんかと思ふうち、公爵は其色を認てか、

「オヤ韋倫、和女の顔は何うしたのだ、酷く氣分でも惡いと見える」

韋倫は返す言葉喉に詰りて、一言も發する能はず、李羅子は傍より、

「イエ、夫人は是ほどまで、私しの事を心配して下さるのです」

と言解きたり。

兎に角も詮索の初らぬうち、再び春人の倒れ居る所に到り、彼れの生死を見屆くる外なければ、韋倫は朝餐の濟むを待ち、李羅子を來客中の夫人達に打任せ、漸く客間を抜出て我父團墩氏の室に至り、昔し預けし彼の僞婚禮の指環をぐふに、父は不審に堪へぬ顏にて、

「和女はアノ指環を何うする氣か、公爵夫人とまで崇められ、何一つ不足の無い難有い今の身で、其樣な事は最う忘れるが好い」

韋倫は强て、何氣なき聲を粧ひ、

「ナニ那の指環の要る事が有るのです」

要る事が有るの一語に、父は忽ち氣附し如く、立上りて眼を圓くし、

「和女は昔し、此指環を渡して呉れと云ふ時は、復讐を仕果せた時と思へと、私に斯う云

た喃」

と問ひつゝ、韋倫が心の底の底を讀破らんとする如く、韋倫の顏を穴の開くほど眺め詰るに、幾年の辛さ、悲しさに鍛へ上げたる韋倫の顏の筋は、此場合に臨みて少しも動かず、又何の返事も無し、父は再び、

「和女は公爵夫人と云ふ身分に負き、父の名にまで障る樣な事はせぬだらう喃」

「ハイ決して致しません」

父は此言葉に安心し、且は幾分か合點する所有りしか、唯獨り頷きて室の隅なる簞笥より、昔し封じて納めたる其指環を持來り、渡さんとして又考へ、

「ハテな」

と云ひて、暫しが程無言なりしが、

「ハテな、日頃から和女が何と無く、餘所々々しく仕て居た西富子爵が、昨日から行方が知ぬと云ふ事だが――」

是だけ聞きて、韋倫はビクリとしたり。

「アレは、歸て來るだらうか」

韋倫は、唯一語、

「アノ樣な人は、歸らぬが好でせう」

父は全く合點したり、最と滿足げに其眼を光らせて、

「好し、サア是を持て行け」

と初て指環を渡したり。韋倫は手に取るだにも我手の燒るゝほど痛けれど、殆と父の膝に泣伏さんとする我が涙を隱し兼ね、其儘に顏を負けて此所を立去りつゝ、見る人無きを幸ひ

に裏手の山へと分入りたり。

ア、春人は如何にせしぞ、猶事切と爲らずして昨夜より苦み續け、今も猶ほ其苦痛に叫べるにや、夫とも彼れが罵りし如く一時に一寸々々、人里を指して這寄りつゝ有るか、若し彼の祕密の場所に倒れたる儘ならんには、縱ひ所天公爵の詮索にても尋ね出す事難からんとは思はるれど、何さま氣掛りの限りなれば、韋倫は踏む足も地に着かず、面を遮る木の枝を拂退け、叢に搦む葛荊を蹂躙り、喘ぎ〳〵て彼の所の近くに到れば、木の間より散散と見ゆる一物は、見擬ふ方なき彼れの身體にて、昨日倒れし儘なれども何の聲をも發せねば、苦み盡して死切れたる者と見ゆ。

更に進みて其頭の許に到るに、然り彼れ全く事切れしに似たり。

眼は安らかに閉たれど顏の一面に一方ならぬ苦惱の跡を留め、且は四邊の草など搔剝り

て有るは、一寸たりとも動かんと悶掻きたる者と知らる、指の先まで泥に塗れ血に塗れ、傷きたる關節は腫上り、傷口の血は早や出盡して半ば乾きたる體たらく、ヲ、是れ何等の無慘なる死樣ぞ。

韋倫は流石女の憫なる心内に動き、此樣を見るに得堪へず、他の人の死骸ならば、縱や見ず知ずの中にもせよ、抱上げて猶ほ一脈の命は無きやと、充分の手を盡す可きなれど、此人の身體には再び觸るだも汚らはし。

此人、是れ我が畢生の讐なるぞ、女の身として此上の辱め無きまでに、我身を辱しめし兇漢なるぞ、と滿腔の憫みを搔消しつゝ、彼の指環を手に持ちて死骸の傍に俯向くに、人の氣を感じてか、死骸の顏は忽ちに眼を開けり。

ヲ、春人は死骸に非ず、猶ほ一脈の命あり、死んとして死に切られず、身體の力盡果た

るの後までも、獨り苦痛のみ感じつゝある者なり。

開きたる其眼は韋倫の顏を眺め、其の誰なるやを知し知く、最と異樣に輝くと共に、乾きたる彼れの唇は、虫の音よりも猶ほ微なる聲を洩して、

「ア、、鬼女、ア、人殺め」

五〇

死骸と思ひし春人が目を開き、虫の息にて猶ほ我が事を罵るを見、韋倫は跳返る程に驚きしも、彼れの命の在るうちは我が復讐の念も未だ消えず。

今彼れに心弱き樣を見られて成る者かと、必死の想ひにて身を落着け、靜に彼の指環を春人の眼の前に差附けて、我身にさへ怪まるほどの穩かなる音調にて、

「モシ西富子爵、貴方に猶だ息の有るのは幸ひです、死切らぬうち一言聞せ度い事が有ります、是れ此の指環を御覽なさい、貴方は見覺えが有ませう」

春人は答ふる能はず、又其指環を眺め詰る氣力も無し、開き居し目を眠る如くに閉ぢたれば、扨は是だけにて彼れの命盡きたるやと思ふうち、彼れ再び眼を開き其指環を眺むる樣、何とやら其覺ありとの意を運ぶに似たれば、韋倫は又穩かに言葉を繼ぎ、

「コレは貴方が神を欺き、私しを欺いた僞りの指環です、是が私しの手に在るうちは、私しの恨みも消えず貴方の罪も亡びません、今は貴方に返しますから是を環めてお死なさい、是さへ返せば私しと貴方の間に少しも殘る勘定は無く、互に全くの綺麗な身と成て仕舞ひます」

と云ふに、彼れ固より手を出して受取らん力なし。

「オヤ受取る事が出來ませんか、貴方の手に障るさへ汚はしいと思ひますが、今は仕方が有ません、ドレ私しが嵌めて上げませう、是を嵌て上るのが、私しの最後の親切だとお思なさい」

云ひながら血に塗れたる春人の手を取上げ、靜に其指環を嵌むるに、春人は少しの抵抗をも現はさずして唯だ爲す儘に任せるは、何の力も其身に殘らぬが爲なる可し。

「是で最う此世でもアノ世でも、再び貴方と顏合せる事は有りますまい」

と云ひ、やをら其所を立去らんとするに、春人が唇は切に物云ふ如く動けるにぞ、扨は何事をか言ひつゝ有るにや、此場合に臨みて彼れが何云ふとも、我身に於て聞を恐るゝ事あらんやと、韋倫は耳を其口許に傾くるに、果せるかな唯だ唇の動くのみには有らで、蚊の泣くよりも猶ほ微かなる聲ありて、

「コレ夫人、今と云ふ今は本統に思ひ知ました、最う貴女に助けて下さいと云ふたとて無益、又云ひも致しません、唯だ一ッのお慈悲には一思ひに私しを殺して下さい、私しには最う自分で死る力も有ません、何うか、何うか殺して下さい、其所等に石でも有ませう、一打に私しの頭を叩き碎けば、貴女の復讐は終ります、是だけがお願ひです、サア、サア」と訴ふるは、生て死ぬより猶辛き苦みを、死して逃れん爲なる可し。

今一思に彼れの頭を叩き割るは、左まで六かしき事に非ず、石を拾ひて其上に落せば足れり。

斯して彼れの命を絶たば、韋倫が身は如何ほどか安心ならん、所天公爵が詮索して、縱し春人の死骸を見出すとも、死人に口無し、其の韋倫の仕業たるを訴ふる事能はじ。

彼れさへ訴へずば、誰か又公爵夫人韋倫が、人殺しの罪を犯せりと疑はんや、去れど韋

倫は唯の一刻も斯る考へを心に浮べず、唯斷乎として、

「イヽエ私しに、其樣な事は出來ません」

と言切りたり。

斯く言切りて彼れが身に、蟲の息だも通はせ置くが爲めに、我身が如何の事と爲り行くやは、韋倫の少しも思はぬ所なり。

假令ひ如何ほどの事あるにもせよ、自ら手を下して人を殺さんとの心は無し、春人の死するは其身の怪我、我身の爲には天の下せし復讐のみ、我身は唯だ彼れを救はずと云ふに過ぎず。

我より進みて石を投じ、彼れが身を害すること、縱し其苦痛を救ふが爲にもせよ、韋倫の心之を許さず。

春人は漸く、韋倫の耳に聞ゆる程に絶叫せり、

「エ、エ、此願ひさへ聞屆けて呉れませぬか」

「ハイ手を下して人を殺す事は、何う有ても出來ませぬ」

春人は切々に、

「エヽ、情無い、何時まで生て苦まねば成らぬ事か、夫人、貴女の仕方は、本統に殺しと云ふ者です」

韋倫は最早や留りて、彼れの言葉を聞く能はず、其儘茲を逃げ去りたり。

逃る後より何物か追來る如く思はれ、再び後を振も得向かず、唯一散に我家に歸るに、此時午後も早や三時過にて、一同の客人は春人の猶ほ音沙汰無きに安き心も無く、若し便あらば我先に之を聞かんと思ふが如く、皆攻關脇なる一室に集りて、顔と顔見合せて有

り。

春人の妻李羅子には、今にも死する病人かと思はるゝほど其顔色の青けれど、是も一室に籠る能はず、心配に驅立られて茲に來り、來客中の貴夫人に痛はられつゝ控へ居れり。

韋倫の所天公爵は、早や約束の如く數多の人夫を詮索に出し遣、自分は中央の差圖役として此室の一方に椅子を置き、人夫より知せ來る報知をば、李羅子を初め一同に傳へ聞かせり。

去れど春人の運の盡とも云ふ可きか、幾隊の人夫は夫々人の通ふ可き道ある所に指て向ひ、春人の今現に倒れ居る、道無き所へは誰も向はず、道無き所に分入りて、春人が倒れて有んとは何人も思はねばなり。

韋倫は歸り來り、先づ室に入りて我が姿を正し、漸く心を落着て此室に來り、一同の口

よりして是等の次第を聞きたれば、少し安心の想ひを爲し、此向にては人夫等が春人を見出すは今日中の事にはあらず、早くも春人が死切りたる後なる可し。

愈々以て我身の疑はるゝ恐れは無しと、窃に我胸を撫づる折しも、忽ち此室に躍入る一物あり、何かと思へば是なん所天公爵より、曾て我身に贈られしベドと云ふ飼犬なり。

ベドは人々の注意を呼ばんとする如く、最と異樣なる聲にて吠え唸るにぞ、韋倫は第一に其姿に目を注ぐに、こは抑も如何にベドの首には、血の着きたる一個の半拭を結びて有り、何の爲ぞと疑ふ迄も無く、韋倫の心には忽ち分れり。

ア、此犬、我身の後を追て彼れ春人の倒れ居る所に至り、春人の手にて此半拭を結ばれしなり、春人は其身が怪我に倒れ居る事を一同に知さん爲め、必死の力にて此犬の首に、此半拭を結びしなり、ア、春人の運未だ盡ず。

五一

ア、惡人の運未だ盡きず、天の降せし復讐とのみ思ひ居たるに、彼れ惡人は我が飼犬の爲に助けられんとするか、餘りの事に韋倫は呼吸も苦きほどに動悸高まり、我身を支ふる事能はず、唯だ一時に逆上して眼眩み耳響き、人々が何を云ひ何を爲せるやを辨ずる能はず。

暫し其首を垂れて、宛も悶絶せし人の如く精神遠くなりたるが、稍ありて我に復り其首を上げ見れば、室中は鼎の沸くに似たり。

李羅子は絶息せしと見え、客の半ばは目を圓くして其傍に狼狽へ廻り、殘る半ばは犬を捕へ、其首より血の着きたる半拭を取り外さんとす。

暫くにして我所天公爵は、其半拭を取上げて檢むると見えしが、頓て最と驚きたる聲にて、

「韋倫、韋倫、一寸と玆へ」

と呼立たり。扨は春人が犬の首に結びたる半拭は、彼れ自身の品にあらで我が半拭なりしにや、我身は彼れの倒れし傍に半拭を遺せしにやと、我より招く心の恐れに韋倫は最早や全く逃れ難き場合と知りたり。

去ればとて返事せぬ譯に行かず、必死の想ひにて椅子より立つに、我身の重き事、千貫の石を負るが如く、我足は一歩も前に出ざらんとす。何うして其所まで進みしや自ら知らず、唯だ蹌跟と公爵の許に立るに、陸軍大佐禮頓と云へる人、其の犬を捕へてあり、我所天は猶ほ半拭の血を眺めながら、

「コレ韋倫、最心配する事は無い、西富子爵は怪我をして、何所か森の中に倒れて居るには相違ないが、ペドが其所を見出したから、此通り春人が此半拭を犬の首に結び、我々の許に知せに歸したのだ、成るほど此犬は日頃から春人に能く慣んで居たよ、コレ此半拭は春人の品に相違あるまい」

見れば成ほど男持の半拭にして、其一端に西富のNの字と春人のHの字を縫附て有り。

我が半拭に有ぬだけは幾分か仕合に似たれど、春人猶ほ生たる儘に救はるれば、我が罪如何で蔽ふ事を得んや。

彼れの品たると我が品たるとは問ふ所に非ず、兎に角も天より我が手の中に下したる復讐は、又我手より奪ひ去られたるなり。

今まで彼の運命を我手に握り居たるも、今は我が運命を全く彼の手に握らるゝ事と爲り

たるなり、韋倫は之を想ひて所天に何の返事も得せず、其所に立すくむに、此時大佐禮頓は、

「兎に角、此犬を案内に立て、我々が其後から隨て行けば、必ず子爵の倒れて居る所まで行くで有う」

「爾だ非常に怜悧い犬だから、充分案内するに違ひ無い」

韋倫は是だけ聞きて、堪へに堪へたる其の身の力盡きてか、

「ウン！」

と一聲叫ぶと共に、其所に氣絶して後は何事をも知る能はず、再び生氣に復りし時は、早や我が寢間の寢臺の上に在り、何人にか玆まで運び入られたる者と見ゆ。

實に此氣絶が韋倫の身の幸ひなり。若し氣絶せずに居たらんには、必ず發狂するまでに

其心を苦めしならん、生氣に復りて韋倫は枕邊を見廻すに、二人の侍女心配氣に我身を守れり。

「オヤ犬は、半拭は—」

是だけが、韋倫の口を衝て出たる言葉なり。

「今まで公爵が貴女のお傍に居られましたが、西富子爵も捨置れぬと仰有つて、唯だ今、玆をお出なされました、最う多分犬を先に立て、山へ分入成つたでせう」

此言葉に違はず、公爵は大佐禮頓氏と共に、幾人の人夫を從へ、釣臺其他氣附の火酒など用意して、犬を案内に森を指し分入るに、犬は思ひも寄らぬ方に向ひ、道なき所へ進み行くにぞ、公爵は少し失望の想にて、犬を引留め、

「是れベドや、貴樣の智慧一つが大事のお客の命に係るから、道を違へず此半拭を結び附

た人の居る所へ案内せよ」

聞分しか聞分ざるか、唯だ尾を掉りて繩を引切る程の勢ひに進み行くのみ。

凡そ一時間ばかりにして、漸く彼の祕密の場所に着き、死骸の如き春人を見出したれば公爵は第一に近きて抱上るに、其首ガクリと垂れ、何の力も無きに似たれば、

「エヽ、殘念な事をした、最う事が切れて居る」

禮頓大佐は、戰場にて幾多の死骸に接したる人なれば、敢て騷がず、

「イヤ、死骸とは少し樣子の違ふ所が有る」

とて春人の胸に手を當て、暫し最靜に樣子を伺ひ、

「果して心臟が猶だ動て居ます、何うか醫者の來るまで生て居れば好いが」

と云ひ、更に其傷など檢めて、

「ア、可哀相に、銃が木の枝か何かに搦まり、其身が倒れんとする途端に撥軌が落ち、丁度自分の腋下で發したので、散彈が一粒殘らず自分の肉へ入たのです」

斯く云ふ中にも、怪我より今まで何時間彼れが唯獨り倒れ居しやは、人々の怪み惑ふ所とし、夫よりも猶怪しきは、彼れの血に塗れたる指の一つに、女の婚禮の指環、異樣に輝ける一事なり。

五二

韋倫は二人の侍女に守らるれども、素より介抱を受くる如き病氣に非ず、我が邪慳なる振舞の露見せんとする恐しさに、自ら我心を苦むるのみ、我心の苦みを侍女等に見拔るゝこと何より辛き所なれば、侍女には最早や心持も直りし故、伽するに及ばずと云ひ、二人

を拂ひ退けて、泣くも笑ふも見る人無き唯一人とはなりぬ。

此間の韋倫の心配は譬ふるに物も無し、飼犬ペドは、果して人々を春人の倒れ居る所まで案内せしにや、春人は今も猶ほ死切らず、我が振舞を人々に訴ふるだけの氣力あるにや。

今は無くとも少し元氣の恢復せば、彼れ第一に我罪を數へ立ん、我身が公爵夫人として溫なる寢臺に眠るも、最う今宵限りなるか、彼れ我身の罪を數へ其上にて縡切と爲る時は、我身は人殺の罪人と看做されん、縱し法廷には引出されぬ迄も、世間の人は皆我身を非難せん。

我身が彼を苦めしは天の許す復讐なりとは云へ、其次第を人に訴へ、我が罪を言開くは、過し我が暗の恥を白晝に持出すなり、益々我が身を辱むるなり。

我身は何と云はるゝとも無言にて、其非難に壓服せらるゝの外無きかなど、留度も無く

思廻すに、其うち日は空く暮れ夜の七時とも思しき頃に至り、家内何と無く騷々しくなれり。

窃に窓掛の片端より窺ひ見るに、幾人の人夫吊臺を舁ぎ、臺の上に春人を載せ、今しも我窓の前を過ぎ、廊下を指して舁込まんとする所なり。

ア、春人は全く人々に見出されたり、彼れ猶活けるや既に死せるや、唯だ是だけが知り度しと、只管首のみ差延すうち、彼れは早や廊下より一室へと連込まれたる樣子なり。

今は詮方なし度胸を定て彼れの傍に行き、其生死を見屆くる一方のみと、韋倫は又立上りて戸の引手に手を掛けたれど、之を開かん勇氣なし。

我身彼れの傍に至り、彼れ若し其目を見開きて、又も「鬼女よ、人殺よ」と呟かば何とせん、其時こそ我身は彼れを罵り懲らす力なからん、ア、辛けれども唯だ運を天に任せ、成

行を待つ外無し。

其うちには、何人か必ず此室に來るならん、其人は春人の終に綷切れと成りたるを知らせる、我身の救主か、將た我身は人殺の罪人として、捕縛の繩を持來る人ならん、儘よ、何も彼も夫までなりと、韋倫は再び寢臺に沈み込みたり。

斯る間に春人は如何にせしぞ、彼れ全く死と生の境に在り、言葉を發する氣力も無ければ、未だ夫人の罪を數へ立る迄には至らず。醫者も來り看病婦も來り、妻も來り、知人も來り、其の手當に餘念なし。

手當の爲にや凡そ一時間ほども經つに從ひ、彼れの冷却りたる身體に、幾分か血の溫かさを呼返し、乾きたる唇も物云度げに動き始めぬ。

去れど彼れ猶ほ眼さへ開き得ず、其身が山より此室まで、救ひ來られし事さへも知ぬに

似たり。

枕邊の人々は熱心に彼れの目、彼の唇を眺めて居るに彼れは吹込れたる火酒に漸く其咽喉の濕ひしが、始て何やらん言葉を發せり。能く聞けば、

「夫人ーがー」

と云ふに似たり。

ア、彼れ此の生死の境に在りて、猶は韋倫の恨しさを忘れ得ず、何事をも云はぬ前に夫人の語を口にせるなり、去れど人々は其夫人とは韋倫なりと思ふに由なく、

「ヤ、ヤ夫人を呼で居ます、夫人を呼で居ます」

妻李羅子は迫寄りて、涙ながらの聲を絞り、

「ハイ妻は玆に居ます、貴方、最う心配なさる事は有ません、お心確かに持て下さい」

此聲の通じてか、春人は初めて目を開き、唯だ怪けに室の中を見廻すのみ。
見廻すに從ひて漸く我身が救はれし事を悟りしか、稍や合點の行きし如く、
「オヽ、犬の爲に助ッたか」
「ハイ犬の爲に、貴方の居る所が分りました」
李羅子は嬉しさに堪へぬ如く、青き春人の頰に接吻するに、春人は怪我の次第を語らんとて、切々に言出れど何の意なるや聞取り難し。唯だ、
「木の枝……撥軌……動けぬ……救て呉れぬ……邪慳な」
などの片語を綴るのみ。
是を聞き公爵を初とし大佐及び其他の人々、交る〳〵彼れの耳に口を寄せ、慰めの言葉を發するに、彼れ次第に氣も確と爲り、

「オヽ公爵か、……オヽ大佐か」
と一々に受答へし、人々の言葉を合點するに似たり。
是より醫師の療治と爲り、夜の十時頃に及び樣々の手術を施し盡せしが、生死の程は猶ほ定ならず、醫者の言葉には傷は左まで恐る可き種類にあらず、充分助かる見込は有れど、唯だ負傷後一晝一夜、何の救ひも無く苦みし爲め、一方ならず疲勞の體なり。
若し死する事あらば是れ傷の爲め死するにあらで、疲勞の爲め死するなりと云へり。
兎に角、此儘極靜かに息ませ置くが肝腎なりとの事なるにぞ、看病婦と其外に、一二の婦人をのみ殘し、其外は李羅子までも此室より退き盡すに、夜の最も靜なる十二時も近からんとする頃、春人は目を開き、先程よりは稍や確なる言葉にて、公爵夫人韋倫を此所へ呼び呉れと云出せり。

我妻李羅子を呼とならば怪むに足らざれど、公爵夫人をとは何の爲ぞ、枕元の婦人達は顔と顔を見合すに、春人は猶ほも、

「イヤ私は何時死ぬるかも知れぬ、死る前に公爵夫人に言はねばならぬ事が有る」

扨は夫人に飼犬に助けられし其禮でも述る氣にや、危篤なる病人は總て詰らぬ事をのみ望む者なればと、看病婦の一人は其意に從ひ、公爵夫人を呼來る爲め此室を出去りたり。

五三

春人が唯一人、韋倫に逢度しとは何を云ふ積なるや、韋倫は我身が彼れに宣告せし如く、今は彼より宣告を受る時來れりと、唯だ恐ろしさに堪ざれど、逃げも隱れも出來ぬ場合、我が運の盡と斷念め尋常に宣告を受る外なしと、漸く度胸は定めたれども、居所に入る羊

の想にて看病婦の後に從ひ、春人の居る室に入行きたり。

一晝一夜、泣きて蹙みし春人の顔は、今は何の色をも現さず、苦痛に固りて石の如くなりたる者にや、彼れ恨めるか彼れ怒れるか、韋倫は見て取る能はず、唯だ當て碎けんとの了見にて、彼れが寢臺の傍に寄り、一切の同情を推隱したる聲にて、

「何か私しへお話が有る相ですが、サア聞きませう」

と促すに、春人は傍の女達に氣を置く如く、

「暫く一同を斥けて下さい、貴女唯一人に話さねばなりませぬ」

女達は此語を洩聞き、是も危篤なる病人の、根も無き望みと思ひ、韋倫の斥くるを待つ迄も無く銘々に立去りたり。

春人は身邊に韋倫の外、一人だも聞く人無きを見濟して、愈々恐ろしき宣告を初るかと

思ひの外、彼れ一語をも發せずして唯だ潸々と泣咽ぶのみ。

韋倫は異樣の想ひを爲し、最と冷淡なる調子を粧ひ、

「貴方は何を泣くのです」

春人は猶ほ咽びながら、

「イヤ夫人、私しが助れば直に貴女の罪を數立る積でしたが、未誰にも貴女の名を云ません、人々に問はれる儘怪我の次第は話ましたが、貴女が此怪我を見て救はずに立去た、其邪慳な振舞は全く誰も知ぬのです」

「貴方の口から出ぬならば、他人の知る筈では有ません、併し夫が何うしました」

「イヤ夫人、今と云ふ今は本統に貴女の復讐を思知りました、自分の苦痛が一方ならぬに附け、貴女の救ふて呉れぬのが益々憎く、貴女を祟殺し度い程に思ひましたが、段々身體

の弱るに付け、何故貴女が救ふて呉れぬで有うと思へば、全く其昔し私しが貴女を苦めた柄の事です、扨は貴女の其時の苦みも是ほどで有たかと思へば、私しは身體の苦痛よりも、我が心の罪が惡ろしく熟々後悔致しました、是では死でも浮ばれぬ、此上夫人を恨むは無理、夫人に我罪を赦して貰はねば成らぬと思ひ、夫からと云ふ者は、目を閉た儘私しは唯だ自分の身を責めて、我罪の亡びるのを祈て居ました、此儘私しが死ぬれば猶更、縱し生るとした所で、再び貴女を恨まぬのみか、貴女の振舞は決して私しの口から出ません、是から心を入替て、ハイ私しは本統の善人と爲り、自分の目にも神の目にも、我罪の充分消る樣に致しますから、何うか貴女も過去た私しの罪を赦して下さい、唯見だけがお願ひです」

云來りて、又も涙に咽返るは、一晝一夜の苦みにて眞に善心を立返り、誠の後悔を初め

たる者と見ゆ。

韋倫は此有様に聊か意外の想を爲せしも、又思へば意外に非ず、凡夫盛なる時は唯だ己を恃とし如何なる惡事をも憚らねど、一旦己の衰ふる時は、自ら恃むに足らざるを知り、眞の後悔を初ること人間の常なればなり。

春人も其身體の動き得ず、其命の絶なんとする場合に望みたれば、全く是も罪の爲と思ひ、罪の恐ろしさに自ら慄くに至りしならん。

去れど韋倫は猶其罪を許すとも、許さぬとも一言の返事なし。

春人は語を繼ぎて、

「イヤ夫人、貴女は定めし私しが此通り死際と爲ッて救はれたのを、猶不足に思ひませうが、之で私しが助るにした處が、貴女の復讐は充分です、後悔と云ふ事を知らぬ私しへ、

眞實後悔する程の苦みを與へた柄は、此上の復讐は有ません、私しは心底から身の罪を貴女に謝します、必竟私しが怪我したのも、貴女の仰有る通り天の隆た復讐です、天罰です、夫で私しが其天罰を受け、罪に相當する丈の苦みに服しましたから、天も是だけ苦めば、最う助て遣て好いと、初て救ひを私しへ下したのです、犬に助けられたのも天の救ひです、實に私しは罪だけの苦みを受ました、ハイ人間世界に又と無い程の苦みでした、醫者の言葉に、縱し命だけは助つても生涯滿足の身體には成るまいと申ます、貴女の生涯を傷けた代りに、私しも又生涯を傷けられました、是でも貴女は未だ復讐が充分で無いと思ひますか」

韋倫は聞來り、且は生替りたる彼れが、全く小兒より猶弱きを見ては、心を動さぬ事能はず、宛も獨語の如く、

「本統に貴方も、充分苦みました」
と云ふに、春人は此一語に、幾分か氣の休りし如く、
「私しの苦みを充分とお思成さらば、唯だ一言今迄の罪を赦すと仰有ッて下さい、貴女の口から赦しの言葉を聞かぬうちは、死にも死れず、生たとて心の重荷が弛みませぬ、貴女の赦しは眞に私しを救ひます」
今までの罪深き春人ならば、死しても吐得ぬ清き言葉を、眞心込めて吐出るにぞ、韋倫は全く我が復讐の充分に屆きしを知り、恨みの心も漸く解け、
「ハイ貴方の罪は私しの口から、決して許すとは云はれぬ罪ですが、思へば私しも罪の深い振舞を致しましたから、貴方の罪を赦し、併せて自分の罪も消る樣に祈ませう、ハイ貴方の罪を許します」

と云ひて韋倫は涙顏れ居る春人の前額に手を宛て、親切に慰撫したり。
一天の妖雲玆に晴れて、初て白日を見るとは、此時の韋倫の心地にして、又春人の心地なる可し。

五四

其罪を許すと云ふ韋倫の一言に、春人は初て心の晴渡りし想ひを爲し、
「是で最う過去た事は何も彼も忘れて仕舞ひ、眞の友達になりませう」
と云へり。
韋倫は最落着きて、
「ハイ今までの恨みは是で忘れますが、併し友達になると云ふ事は出來ません、私しと貴

方とは互ひに愛し合ふか、左なくば憎み合ふ樣に生れて居るのです、愛しもせず、憎みもせず、唯だ親みて友達の交りを結ぶと云ふ事は、何うしても出來ぬ所です、此後ともに度度顏を合す事が有れば、過た恨が再び燃上らぬとも限りませぬから、玆で双方の恨の鎭づたのを幸ひに、之を二人の逢納めとし、全くの他人と爲て仕舞ひませう、此後とても私しの所天が、此屋敷へ貴方を招く事は度々ありませうが、貴方は事に托して體よく斷り、又と此屋敷へ足踏せず、又と私しの目の前へ顏を出さぬ樣に成さらねばなりません、其他私しの臨む宴會へは、貴方は決して出ぬ事に成さい、命の取遣までした二人が、何して友達と爲る事が出來ませう、唯だ是切り顏を合さずに居さへすれば、自然と恨も忘れませう、此外に決して無難な道は有ません」

春人も暫し考へ、從順なること小羊の如くに、韋倫に從ひて、

「成る程爾です、是から再び貴女の目の前には出ぬ樣に致します、止を得ず落合ふ樣な事が有ても、唯一通りの挨拶に止め、其外は口を聞かずに濟む樣に私しが勉ませう」

「ハイ是だけの約束で、貴方の罪を許します」

「では是が最後のお分れです、何うか思切の爲め、一度貴女のお手を」

韋倫は無言にて其片手を差出すに、春人は奴隷が君主の足に接吻する如くに、韋倫の手を接吻せり。

韋倫は是にて玆を立去りたるが、此夜初めて落々と眠り得たり。

翌朝は春人も大に元氣附き、李羅子の喜び一方ならず、頭邊に着添ひて離れも得ざる風情なるにぞ、春人は怪我の次第を物語るに、

「夫にしても何して先ア、公爵夫人の飼犬が、貴方の倒れて居る所へ行たのでせう」

春人は夫人の「夫」の字も口に出さず、

「イヤ是が全く神の助けと云ふ者だらう、神が助けに送たのだらう、アノ犬は日頃から私に慣て居て、私の顔を舐初めたから、夫で半拭を結び附たのサ」

「猶一つ合點の行かぬは、此婚禮の指環ですが、是が何うして貴方の指へ」

春人は少し返事に閊へしも、頓て何氣なく、

「是は山で拾たのさ、怪我の記念に何時までも斯して嵌て居る積りだ、怪我して倒れて居る間には樣々の心が起り、若し助かれば生れ返た程の善人に成らうと斯思つたから、是が善人に生れ返た其記念しだよ」

「だつて貴方は、今迄だつて善人では有ませんか」

「イヤ是迄よりも、又一層の善人に成度のだ」

是にて何も斯も治りたれば、春人の怪我は容易には癒さず、暫しが程は英國中の噂とは爲たるが、韋倫は是等の噂を聞くが夏蠅く、其の充分鎭りて今までの事を忘るゝまで、孰れかに身を避んものと、所天公爵に旅行の事を請ふに、公爵も最愛の妻が數日來何と無く顏色の晴れぬを見て、病の元にても成りはせぬかと氣遣ひ居し所なれば、喜て承諾し、屋敷サクソン宮は、春人の養生所として彼等夫婦に貸與へ置き、直ちに韋倫の手を引きて歐洲大陸に旅行したり。

旅行に半年餘の月日を費し、再びサクソン宮に歸りし時は、春人も既に己れの屋敷に引移り得る程に快よくなりたる後にして、且は李羅子にも、玉の如き男の子の生れ居たり。

間も無く春人は元の通りの身體と爲り、醫者が生涯の廢者ならんと云ひしに似ず、何の廢疾ともならず、再び政治舞臺に打て出る事と爲りしも、韋倫と結びたる最後の約束は少

しも違へず、又とサクソン宮に來らぬのみが、韋倫の臨む宴會へは面も出さず。

勿論韋倫は交際場裡の女皇とも云はるゝ程なれば、韋倫の到らぬと云ふ事なく、春人は斯る所に踏入る道を絶れたれば、勢力ある人に充分なる交際を結ぶ能はず、今まで日の出の勢ひありし彼れの運も、之が爲に面白からず、政治界に名も無く、勢力も無き人と爲り果しは、惜む可き限りとは云へ、一旦清き少女を欺きたる其罪の、自然に酬ゆる者なれば、又是非も無き次第と云ふ可し。

實に天の罪は人の罰ほど目立ざれど、人の罰よりも確にして又充分なり。

是に引替へ韋倫の勢ひは實に現世に例なき程にして、英國第一の美人と立てられ、又女皇に次での貴高夫人と崇められ、其姿は寫眞とし、油繪として、今や孰れの家の壁にも掛られぬは無き程なり。

韋倫が復讐を果したる事は、唯だ其父の團墩氏が曉りたるのみにして、其他には韋倫及び春人と、此書の著者の外に知る人なし。

著者は誰ぞ、此ほど政治界より退きたる子爵西富春人なり。

韋倫今は子も有り、所天公爵と共に無上の幸ひを受けつゝ有り、幽欝畫家として知られ、曾て笑顔を描きたる事なき其父團墩氏さへも、今は笑顔を畫く事と爲り、彼の畫名は益々高し。

嬢一代（終）

昭和十六年六月五日印刷
昭和十六年六月十日發行

定價金壹圓參拾錢

著作者　黑岩涙香
發行者　東京市日本橋區通三丁目五番地　飯島竹次郎
印刷者　東京市神田區神保町三ノ廿三　佐藤三次

三美堂印刷所印行

不許複製

嬢一代

發兌元　東京市日本橋區通三丁目五番地
電話日本橋六八四・振替東京四五五四番
明文館書店

最新刊・大好評

黑岩涙香先生譯

巖窟王 上卷 定價金壹圓卅錢 送料金十錢

同 下卷 定價金壹圓卅錢 送料金十錢

噫無情 定價金壹圓卅錢 送料金十錢

鐵假面 定價金壹圓參錢 送料金十錢

幽靈塔 定價金壹圓卅錢 送料金十錢

村上浪六先生著

八軒長屋 前篇 定價壹圓卅錢 送料金十錢

八軒長屋 後篇 定價壹圓卅錢 送料金十錢

馬鹿野郎と稻田一作 定價壹圓卅錢 送料金十錢

人間味 定價壹圓卅錢 送料金十錢

當世五人男 定價壹圓五拾錢 送料金十錢

發行元 東京市日本橋區通三ノ五 振替東京四五四五番 電話(24)〇・六八四番 明文館書店

終

明文館発行

¥1.30